

春假雜錄

二

明治三十二年八月以降

特別
14
1919
230



昭和十六年十一月十七日

目録
14
1919
巻 32

特

~~目録
15
1880
巻 32~~

昭和十六年十一月十七日
市島謙吉

早稲田大學講演會

昨二十五日午後一時三十分より愛知縣會議事堂に於て早稲田大學講演會を開き上遠野富之助氏より簡單なる開會の辞ありて第一席に講師青柳篤恒氏登壇し「嗚呼清國の先皇帝」と題し次で講師島村抱月氏は「東西趣味の比較」と題し次で同大學圖書館長市島謙吉氏は

校外教育

と題し左の意味の演説を試みられたり自分は現下の教育界に於ける或る疑問を訴へ諸君の批判を煩さん考へなりしも今回當市に來り圖らずも倉岡勝彦君が獨力を以て通俗圖書館を經營せらるゝ由を聞き些か校外教育に就て私見を述べんと的前提を置き名古屋市の如き日本有數の大都市が一の圖書館なきは市民の爲め其不幸を嘆かざる能はずかく云へば市の施設すべき事業多事多端を極め到底如斯餘裕なきと答ふる向わらんも之れ大なる誤

解なり余は此際圖書館の必要を叫ばざる可らず由來名古屋市には最も注目すべき

圖書館に類するものありとて大須眞福寺に國寶に準すべき百餘種の珍書ある事より當市出身の坪内逍遙博士が小供の頃大莊と云ふ貸本屋によつて盛んに文學書籍を繕き以て今日に至りし實例を説き市民は何故に圖書館の如き文明國必須の事業を完成せざるや余は大に疑問とする所なり圖書館は單に娛樂的の產物にあらず目下最も發達せる米國の如きは電車内にて職工は何れも圖書館の書籍を繕き研究する實例に徴するも明かなれば今後は宜敷米國の特長を採り巡回文庫及び有力なる書籍の活用を努むる管理人ある完全なる圖書館の設置に盡力せられん事を望む旨を論じ拍手の裡に降壇し最後に法學博士有賀長雄氏登壇し萬國地圖を背後に掲げしめ「世界外交の現状」と題し詳細説明せられ六時過拍手喝采裡に閉會せり當日は炎暑なるに係らず數百名の傍聽者ありて頗る盛況なりき（七月二十六日扶桑新聞）

町新東洋編撰所代十二號
高杉東街編輯所見て本誌主筆の存す
る所を見るべし
○東京經濟雜誌 一五〇〇、一五〇一、
一五〇二、一五〇三、京橋 瀧左衛門町
經濟雜誌社發行

一冊金十錢郵税一錢
重なる目次 日糖事件に得たる五大教
訓 現在宮中に對する先覺者の要求西
南の別天地天津の風光、雜談風情に於
ける名士其他内容充實多きを感ぜ
しむ
○明治評論 十一、八、明治大學内共
社定價十五錢
新聞界の革命(三宅雪嶺)官學に依らず
して博士となりし花井忠藏氏(澤田撫
松)日韓協約(仁井田博士)自然主義
の反對(國谷博士)等
○實業の大坂 一二五、大坂東區北區其社
本誌創刊十周年を以て九月
一日發行を紀念號とし内容に刷新改善
を加へ以て時運の進歩に應じ一大實業
雜誌として天下に飛躍を爲さんとする其
意氣を壯なり其感譽や良し庶幾くは筆
硯、健在にして實績を挙げよ
○警友 四九、警察協會支那支部友會
發行

○實業の日本 一二一、一六、京橋其社
重なる目次 夏休の居前準備と夏清
○進歩 一、四、町、内幸町其社
目次 進歩 公報 月刊 附録
録、政現、資料、文苑等一冊十二錢
重なる目次 夏休の居前準備と香油噴
水、現代社會黨の憲法、露國の秋男
兒、運世進言等多くは夏休の精神的健
康と實業の目的と對して文字を紙面
に溢るゝの心地あり
○實業の日本 一二一、一六、京橋其社

先哲漢籍國字解全書

(豫約發行の趣旨)

士成五五
行利執

漢籍國字解と校外教育

高等學術の普及は國運發展上、極めて切要の事たり。然るに高等の學校に
は自ら制限あるが故に、何人も隨意に入學し得べきにあらず。然らば何等の方
法に依て、校堂以外に高等學術を普及せしむべきか。此問題を解決せんが爲に
古來幾多の方法は按出せられたり。而かも **講義録の頒布** の如く其効果
の廣く且つ大なるものはあらざるなり。徳川時代に於て盛に行はれたる **漢
籍國字解書** の如きも今時の謂ゆる「講義録を以て **校外教育** を試み
たるもの」に外ならずして、之が爲に當時の先進國たる支那の文化を融化して
廣く之を上下に傳へ、當時の人文を開發して燦然の光輝を放たしめたるの功
は極めて大なりと謂はざるべからず。

徳川時代に於ける學者の氣風

抑學術は研鑽に依て其光輝を増し、普及に依て其効果を増すものなれば、研鑽

(1)

と普及とは兩々相離るべからざるものにして、其價値の大小は容易に軒輊すべからざるものあり。元和偃武以降、幾多の碩儒輩出して、當時唯一の學問たる漢文上に深奥なる研究を試みたるを以て、其著書の如きも實に汗牛充棟の多きに達し中には支那先哲の研究を凌駕せるものも尠いとせず、亦盛なりと謂はざるべからず。當時に於ける學者の氣風は、自ら深酷の研究を試みて諸家の説を評論し説破し其創見を立つるを以て能事となし、其著書にも國文を用ふるを屑いとせずして漢文を用ふることを喜びたり。舉世の學者をして悉く此擧に倣はしめたらんには、其學說文章は如何に高妙なるにもせよ、其利を享くる者は一部少數の専門學者に過ぎざるを以て、一般風教の上には大なる效果無かりしなるべし。若し漢文の著作を以て雷名ある碩學をして其力の一半を假名文の著作に用ひしめたらんには、其效果は漢文の著作に幾倍蓰せしや知る可らず。其然らざりしは文教の爲に深く惜む所なり。

學問普及上貴重の學者

然るに幾多の學者の中には其識見俊邁にして卓然時流を脱し、深邃の研究鑽を提げて學問の普及に努めしもの無きにあらず。林羅山、荻生徂

徂、熊澤蕃山、貝原益軒、中村惕齋等の如き其最なる者たり。是等碩儒の著作には漢文を以て貴重なるもの固より尠からずと雖も、之よりも更に貴重なるは學問普及の爲に特に著したる國文上の著作に在るなり。是等の碩儒は蓋世の學殖を有せるに拘らず、自ら小學教師に身を窶し、特に平易通俗の國文を用ひて支那の學問を俗間に紹介し、學堂に上り講義を聽く能はざる者に廣く之を普及せしめんことを試みて、一世の風教を助け、其惠澤を後世に及ぼせるものなり。其功や偉なりと謂はざるべからず。若し徳川時代をして是等の學者を出さざらしめば、而して凡ての學者をして力を漢文を作る事にのみ注がしめ、儕輩と競ひ儕輩に重ぜらるゝ事にのみ勉めしめたらんには、學問の普及は或少數範圍に止まりて幾十萬人の上に及ばざりしや必せり。貴むべきは、是等卓見の學者なるかな。

國字解書の沿革と其効果

今翻て國字解書の濫觴如何と考ふるに、之を推理の上より見れば我國に漢文の盛に研究せられ且假名文の盛に行はれたる平安朝時代に於て夙に其萌芽を發したるべき筈なれども、今之を文献に徴するを得ざるが故に

鎌倉時代に於て**尼將軍平政子**が政務の参考の爲に**貞觀政要**の假名文を書かせたるを以て其濫觴と見做さざるを得ず。降りて足利時代に至りては、此類の書、五山僧徒の間に盛に行はれたりと見え**五山抄**として傳へらるゝものゝ少からざるが中に、蘇東坡の詩集を講述したる「四河入海」史記を講述したる「史記抄」の如き大部の書籍すらあり、以て其盛況を推すべし。然れども其廣く世に行はれしは元和偃武以後にあるなり。

文祿の役に朝鮮の典籍を鹵獲し歸るものあるに及び、朝鮮には**諺解**と題する一類の書籍ありて漢文の普及を助けしものなること知られたり。**林羅山**の「古文眞寶諺解」、「孝經諺解」、「孫子諺解」等は朝鮮の名稱を其儘に襲用せしものにて、蓋し本邦に於て諺解と題せる者の嚆矢たり。かの俚諺抄と云ひ俚諺解と云ふもの皆之に倣へる名稱に外ならず。惟ふに諺解とは諺文朝鮮の假名文にて書ける解釋の義なるを、羅山は和文にて書ける解釋の義に轉用せしものなれば、固より穩當なる名稱にはあらず。故に**荻生徂徠**の如きは諺解の名稱を襲用せずして**國字解**の名稱を用ひたり。莊子國字解、「孫子國字解」の如き其一例なり。國字解とは言ふ迄もなく、日本の國字なる假名文にて書ける解釋の義なれば其名稱の穩當なること諺解の比にあらず。故に特に廣く行はれて

國字抄、國字辨など云ふ名稱は幾多の著述家に用ひられたり。**中村惕齋**出づるに及びて更に**示蒙句解**の名稱を用ひたり。惕齋は其學殖の豊富なるが上に兼て國文を善くせしを以て、巧に經典の微旨を發揮して餘蘊なきに至らしめたり。故に示蒙と云ひ句解と云ふが如き極度の謙辭を以て其書に題せしにも拘らず**國字解書中の隨一**と稱せられて廣く上下に行はれ、以て幕末に及べり。此他に谿百年の**經典餘師**と云ふものあり、其講述の甚だ淺薄なるものあるに拘らず、漢學者の間に一般に必要な書籍は、大畧之を網羅したるを以て、最も廣く行はれたる者の如し。唐詩選餘師、古文眞寶餘師等は之に倣へる名稱に外ならざるなり。是等の書籍は何れも印刷せられて廣く世に行はれたる者のみなれども、他に幾多の印本寫本ありて廣く上下に繙讀せられたる事なれば**國字解書**の爲に**學問の普及**を助け、**人文の發達**を促したること幾何なるを知るべからず。其**効果の大**なる蓋し意料の外に在るべし。

古典教育と漢籍

古典の教育

は語學文學の上に於て、倫理哲學の上に於て、はた好尚人格

養成の上に於て極めて重要な位置を占むるものたり。これ西洋諸國に於て希臘羅典等の古典が今尙盛に行はれ、我國の往時に於て漢學教育の尊重せられし所以なり。而して漢學教育の我國に缺くべからざるは、嘗に西洋に於ける希臘羅典の比のみにあらず、何となれば、其文字用語は千餘年來の使用によりて我日常の言語文字となり、其思想好尚は、本邦特有の文化を形づくりにたりたるものなればなり。漢學教育の重要な何ぞ多言を要せん。然るに維新以後、西洋新學術の輸入せらるゝに及び、學者皆その珍奇精妙なるに驚きて之が研究に熱中し、復和漢の古典を顧るもの無かりしを以て漢籍の如きは概して高閣に束ねられ、年と共に散佚して今や容易に蒐集すべからざるに至れり。我第二の國文たる漢文の閑却せられたること斯の如し。故に後進子弟の中には、其身の高等教育を受けたるに拘らず、日常普通の文辭をすら綴り得ずして先輩の嗤笑を買ふものも尠しとせず。加之古來倫常の大則と崇められたる古聖賢の格言も古典の衰廢と共に痛く其威嚴を失ひ、復後進を律する能はざるに至りたるを以て放縱自恣の弊風は日に益甚しからんとす。是に於てか古典教育の忽にすべからざること、遍く識者の間に認められ、一世の氣運亦、漸くに往時の漢籍を回顧するに至れり。

往時の國字解書の現時に切要なる所以

漢籍の効用漸く世に認めらるゝに及び、幾多の注釋書類は出版せられたり。而かも吾人をして首肯せしむるに足るものは殆ど有ること無し。請ふ吾人をして少しく其理由を述べしめよ。思ふに支那古典の長所は富贍莊嚴なる文辭の間に活躍せる倫理的信念の莊高偉大なるに在るなり。故に之を修むる者は、其文辭に熟達して各種學問の基礎を築き得ると共に、其好尚人格をして高潔ならしむべし。これ豈一世の風教を維持するのの上に於て物質的文明の餘弊を矯制せんとするのみに於て、特に漢籍教育の切要なる所以にあらずや。然るに莊高偉大なる倫理的信念を發揮して其感化を與ふることは、著者自ら熱烈なる信念を有するに非ずんば能はざる事なり。文辭の解釋は兎も角も、信念發揮の一點に至りては、今時續出の注釋書類は甚しく劣れるものと謂はざるべからず。然るに漢學的精神の旺盛なる時代に當り、燃ゆるが如き信念に動かされて執筆したる國字解書に至りては、其熱誠紙上に躍り讀者に迫るの概なくんばあらず。これ今時續出の冷々淡々たる注釋書を以て遙に往時の國字解書に及ばずと爲す所以なり。加之、漢學の隆盛

時代に於ける**老大家の著作**は平易通俗を以て旨と爲し、毫も衒耀の迹なきを以て、何人にも容易く讀み得るものたるに拘らず、**其研究精緻**を極め、**幽玄の域**に入りたるを以て**新見卓說**の到る處に溢るゝを見るべし。これ豈漢學の衰頽せる現時の學者の企て及ぶ所ならんや。本叢書の特に現時に必要なる所以實に茲に在り。

本叢書の發行

本大學は徳川時代の老大家の著せる無數の國字解書に就き其最良なるものを選択發行する事の急務なるを思ひ、國字解書の蒐集に努むるもの多年、其得難きものは内閣文庫、帝國圖書館、東京帝國大學圖書館、本大學圖書館、名門大家の**珍藏本**を**謄寫**し、今や何人にも必須なる漢籍全部を網羅し得たるを以て之を十二卷に分ちて加盟諸彦に頒たんとす。

本大學が校内幾千の青年を教育すると共に幾多の講義録を發行して、日新學術の普及を圖るの傍に於て、溯りて本叢書を發行し、必須の漢籍を一括して廣く之を世に紹介せんとするもの實に**古典教育の復活**を**熱望**するに由る。これ豫約發行の方法を設けて特に其**價格**を**低減**し、普く之を僻陬の地に及ぼ

さんことを期する所以なり。然れども本叢書の如き大部の書は、僅に數十部を貯ふること容易ならず、況んや之を再刊することをや。故に豫約の期を逸する者は永く本書を得る能はざるべし。同好諸彦の此好機を逸せずして陸續加盟せられんことを切望す。

豫約の正確

世の所謂豫約發行の書籍に在りては發所者は其約を履まざるを以て常と爲すが如し。その或者は期を誤ること數年の久しきに亘り、その或者は豫約書目の大部分を削り、甚しきに至りては圖書發行の成算なくして豫約募集を爲すものあり。これ實に不徳の甚しきものにして好書家諸彦中、これ等の奸計に罹られたるもの尠からざるべし。本部は是等の惡風を出版界より一掃せん事を期するものなり。大日本時代史、經世七大名著等の大部冊の豫約書が如何に正確に發行せられしかは江湖の知らるゝ所なるべし。幸に玉石を混同すること勿れ。

再版の不能

本書の如き大部の書籍に在りては僅に數十部を残しおきて不時の需に應ずること容易ならず、况んや之を再版することをや。故に加盟部數の未定なる間に、發行準備の爲に印刷せる二三冊を除きては全く紙型を取ること無し。而して其印刷部數は加盟部數に照して定むるが故に、加盟期に後れたる者は本書を得ること能はざるべし。豫め了承を乞ふ。

漢籍國字解全書解題

孝經 熊澤蕃山講述

本書の性質 孝道を設けるを以て其題號とす本書に記す所は孔子が門人曾子に向ひて子たる者の 父世に對する本務 即ち孝道を問答説述したる者なり何人が之を筆記し其の意を以て古より傳へしものにして決する所あらず然れども呂氏春秋に孝經を引き又漢人の傳ふる孝經傳に孔子の言として我志在春秋行在孝經とあるを觀れば其書の古くより傳はりしこと疑ふべくもあらず故に後世之を傳りて十三經中に收め奉事天皇の御宇には天下に詔して家ごとに一本を備へしめ給ひしことあり其内容を見るに天子より庶人に至るまで凡そ人生の百行を以て皆一孝より推し弘むべきを云へ故に東洋倫理の根本思想なる家族關係の如何を詳釋研鑽することに必讀の書たるのみならず人の子たる者の拳々服膺すべき教訓たり 本書に古文と今文との二種あり今文とは漢初に河間獻王が當時通用の文字を以て寫したる書に基ける孝經にして古文とは漢の武帝の末に孔子の孫中より獲し蝌蚪文の書に基ける孝經なり然れども古文と今文との間には小異同あり一過ぎざるなり今文には鄭玄の注あり古文には孔安國の注あるれども散佚して傳はらず現有の注は徐彥の傳本なりと去よ太宰春彥が足利學校より得て校刊したる孔安國注の古文孝經は清國に傳はり鄭玄の知不足齋叢書に收められたれども是れ亦孔安國の注にあらずと稱せらるる今文に收むるは熊澤蕃山の今文に基きて懇切に講述したる孝經小解(刊本)にして孝經國字解中の隨一なるものたり

漢籍國字解全書

漢籍國字解全書

地方の図書館

早稲田大学 市島謙吉氏談

一 保存主義は不可

長岡市教育會に於て図書館の經營に任し其發展を計ると謂ふとは、我輩の雙手を擧げて養成する處である。而して御尋の經營に關する問題に就ては、自分の經驗上種々なる考案がないでもないが、専門的の詳細のとは後日を期し茲には參考迄に其一端を述べて見やうと思ふ。自分の考へては單に長岡市とは限らぬが、地方の図書館は先東京の大橋図書館の様な方針が宜からうと思ふ。在來地方に於て設立せらるる図書館を觀るに、第一に考慮せらるるものは主として書籍の保存と云ふ點であつて、書籍の活用と云ふとに重きを置かぬ傾きがあるやうだ、之が地方図書館設立者の第一の誤解で、書籍の保存と活用とは全く其趣を異にして居る。

若し圖書館の目的が書籍の保存を主とするにあれば、其衝に當るべき人は老實でさへあれば可い譯だけれども、書籍を活用する特質より考ふれば唯蔵番的の老實したる人の手に委して置く譯には參らぬ。即ち新しい思想教育を有する、鋭敏なる當事者を要するとなるのである。日本では古來書籍を尙ぶの風があつて、從て圖書館と云へば直に蔵を聯想する。大圖書館も多少此氣味がある。書籍を大切にすることは強ち悪いとはないが、其が爲め書籍の活用を失ふ様なものがあつては圖書館本來の目的を没却するとなる。或は謂ふ日本人は公德心欠乏するを以て、盜難の恐があるから監督を嚴重にせねばならぬ云々。併し書籍の盜難を苦にする様では、到底公德心の養成も出來ぬと思ふ。且つ經濟上より見ても、保存主義を主とするには、勢ひ多數の監督事務員を要し、從て相應の經費を要する

譯であるから、寧ろ太つ腹に譯の第一部や二部は、亡くなつたら補充すると云ふ方針をとるのが廉上りである。

二、書籍

地方の圖書館中に、いかにその多からんとを期するにや、また利用出來る古書類等を誇るが如き風あるものあるは大間違である。尤も之は其圖書館の目的に依て相違するとして、譬ば帝國圖書館や、早稲田大學圖書館の如きものは、殆ど無制限に書籍が必要だ、と云ふ者は、其設立が凡て研究的の要求に應ずべき目的を存する譯であるから五年に一回十年に一回の閱覽人があるとなふ様な書籍でも備付る必要がある。併し普通の圖書館殊に地方の圖書館は之と違ふ。平たく云へば古書類等を集めるとは二段の話を、書籍の寄附を受けるなり、また長期の約束で寄附を受けるなりして、眞に用を感ずる者を集めるの必要だ。徒に書籍の多きを誇る

が如きは恩の至りと謂ふべしである。元來圖書館に於ては書籍の廻轉の脚繁なることが要點で、一冊の書でも百回せば百冊となり、更に廻轉の度數に従ひ千冊とも萬冊ともなる。此が大切なる點だ。古書等を何萬巻集めたとて曾て働かず、宛も藏敷なしの預り物同様では困る。所詮圖書館に於てはCircularateする書を撰擇すると、Circularateする様な便宜を考ふることが重要な任務で、而して此注文に應ずるには、到底藏番的人では駄目だ。即ち

おしめさへすれば結構である。現に外國先進地の圖書館では、書籍の買入にも力を入るけれども、館費と圖書費とを比較せば、人間の方が餘程多額となつて居る。全く斯くあるべきだ。

三、索引の適否

死活的體は、擧げて其衝に當る者の掌中に存するものにて、從て非常に頭腦を要する譯であるからである。世間では圖書館の衝に當る者の如きは、何ても可い様に思つて居る。殊に日本現在の考へては、可成圖書館の經常費を省いて、多く書籍を買さへすれば可い様に心得て居るが、之は實に愚論で、働かせる人を採用し、書籍の廻轉を頻繁な

第一に大切なるは索引及目録の編成にて、此方の良否が最初に死活の岐と所であるから、何れの書に於ても明瞭適切に分る様にせなければならぬ。例へば支那の叢書類、「知不足齋叢書」「漢魏叢書」等は、目録には其標題の一行さへないけれども其内容には幾種類も包含されて居るので、考のない者には全く分らぬ。故に之を分解して細目を作り一冊中の凡ゆる事柄を活用せしめて、凡ての頁を働かせる様にするのが大切だ。而して是等は口之を旨ふは容易であるが之を實行するは仲々困難であるから、透明なる頭腦と敏活なる手

腕とに俟たねばならぬ。西洋の目録の作方は一口に云へば、早稲田にても行ふて居るが、目録には書名計りてなく略其内容も分る様に出來て居る。元來圖書館へ行く人は、學者計りと限つて居らぬから、初めから斯々の著者で斯々の標題なりと云ふ様なとは兎も角或は鑛、石油の事等にも、何國の石油業の實況、何式の掘鑿法と云ふ如きは實務家の知りたがる者にて、必ずしも著者標題の如何は問はぬのである。されば此場合其要求に應ずるには、目録にて直ぐ出て來るものが必要だ。それには索引が第一である。而して完全なる目録は普く實地には行はれ得ざるも、幾千かは行はれる。先一冊に就てカードを幾何も作る。著者を主としたもの、標題を主としたもの、内容を主としたもの等、三つも四つも作つて、恰も外國の辭書風にすると分る。

例へばこの部を見れば、著者、標題、内容、註等のあらゆる者が出て来る様にすると肝要だ。而して此事は大小の図書館何れに於ても出来得ぬとはないが、一ヶ月に何萬巻を買入れると云ふ様な大図書館よりも小規模の方が行ひ易いのであるから、此點に注意して懇切周到なる目録を作るとは、應て書籍の廻轉を頻繁ならしむるに至るので、即ち其衝に當るべき有爲の人物を要するととなるのである。

四、斯の如き人物を要す

斯の如く其衝に當るべき人は頗る立派な人物でなければならぬ譯であるが、然かも左様に注文向の人物は容易に得らるゝものでないから、地方に於ては第一書籍に興味を有つて居る人を選擇するを要す。既に其趣味あり加ふるに喜て人の説を聞き、忠實に立働さへすれば、自然に活用せしむるに至るは請合だ。図書館内部の經營施設は勿論

外部に於ては、書物を貰受けることも大切だ。時に高等乞食と謂はれるかも知れぬが、立派な目的信念を有して居る以上何等の顧慮するとはないのみならず、圖書館の衝に當るべき人は高等乞食となるのが肝要だ。冠婚葬祭に就ても、香典返しとか、祝儀の返禮とかの爲に貰ふ様に説いても可い。蓋其人として僅計りの金でも、永久に傳はる程輝くものであるから、熱心に努むれば社會公益の爲に相當の寄附を厭はぬであらうと思ふ。

五、書籍の撰擇

地方の圖書館に如何なる書籍を撰擇すべきかと謂ふに、(一)從來刊行された中の書で普及的の性質の種類を撰ふと現代の書は勿論、古くとも日本外史か西國立志編の如きは必ず備付の必要がある。(二)辭書類は凡て備付ると、値段が高くと必ず一通り揃へて置くがよい、但辭書類に限つては何れの圖書部でも館外へ貸出をせぬとして居る

(三)新聞雑誌の有力なるものは同一のもの二種をとり、一種は閲覧人をして自由に閲讀せしむると共に一種は丁寧に永久に保存する。爾來の歴史は大半新聞紙の資料に俟たざるべからざるものなれば、圖書館に於て新聞紙の保存は重要なのである。(四)地方の特色に向て設備すると。例へば長岡市の如きは鑛業、金融に關する者、即ち農商務省の油田調査圖の如き、内外國の調査資料統計表の如き特に集めるとが必要だ。之等のものは一個人で集め得らるべきものでないから、其道の人には非常の益を與へ、同時に算盤と首引で圖書館等と縁遠い人に圖書館の効果を知らしむべき好機會を與へる。更には等必要的のもの、他尙一つ考慮すべき問題がある。

六、清新なる娛樂

西洋各國の圖書館は、萬事に行届いて居つて、其建築の宏壯なる、内部裝飾

の美麗を極むると寺院と略好一對である。蓋寺院の宏壯なるは、一度其殿堂に屏を投すれば、俗情自ら雲散霧消して敬虔の念を生じ、竟に宗教心を發揮せしむべき手段に出るもの、圖書館もまた之と同様である。人間素より憂患の事多し、營々として世路の難を遇る、俗了せざらんと欲するも得んやである。然るに一度清閑を利用して圖書館に入れれば、其處には何千圓もする名家の揮灑あり、濶然として天下の奇觀を眼眸に映出せしむるの想あらしむるが如き、また暑きに電氣扇の涼を送り寒きに暖爐の暖を與ふる等、讀書の利益の外に清新なる一日の娛樂を享受するので、即ち一種寺院に參讀すると同一なるものと考へらる。日本に於ては徳川侯爵家の南葵文庫が稍や其範に取れるものであるが、アノ様な美麗の圖書館で聖賢の書を讀むと云ふとは、非常有益なることで、決して贅澤のもの

ではない。併し之は大圖書館の土地に於て望み得る處ではないが、幾分此邊の注意を失はぬとを心掛け、懸額、先哲の肖像、圖書等の裝飾を施しまた健全なる小説類等をも集め、清新なる娛樂を與ふる設備を閉却してはならぬ。圖書館のとは、素人や道學者風の考を以て見るべき者ではない。若夫圖書館の經營に就ては、其性質上一個人ではやり切れぬものであるから、有力なる團體を組織し、最初に確乎たる實行的の案を定め、其地文化の爲に公費の補助を仰ぐも差支ないであらうと思ふ。

七、巡回文庫の利益

一縣樞要の地に圖書館が出来たら續いて巡回文庫の企てが必要だ。現に新潟積善組合の巡回文庫の如きは、中央に於ても心ある人は皆賞賛措かざる處である。ナニ柏崎圖書館も郡内までやつて居るとか、其等は實に結構のとだ。

巡回文庫の極端なるものは貸本屋であるが、或意味に於ては日本に於ては在來の圖書館より貸本屋の方が餘程振つて居る。西洋に於ても古昔書籍の尠かつた時代には非常に書籍を太切にしたもので、古い圖書館の圖を見ると、書

趣味談叢

(續前)

北越新報が九千號に達するとあらば新聞紙の最も適當で、之を種々の方面から話して見たら趣味頗る饒からんも、併し斯る突嗟の間に詳しくは出来兼ねるとであるが、差當り九千號と云へば新聞も相當に古いとであるから此場合日本に於て新聞の起つた時とを少しく話して見やうと思ふ。

此に慶應の頃に板になつた其時分の新聞の番附一枚ある。之は頗る稀有な珍奇のもので、當時繪草紙屋から出したものであらう。板本もまた出版の年月日も書いてはないか、其時代の新聞の沿革は一目瞭然たるものだ。此通も六寸餘の四寸餘と云ふ極めて小さなものではあるが、新聞の歴史を語るのに大切なものだ。

元來日本に於ける新聞の起原に就ては、種々の説もあるが、我輩の考へては矢張り慶應にあると思ふ。即ち此附の示すが如く慶應三年から初まり殊に深山出て居る。中に大政官日誌、行在所日誌の如き公報を初めとして、海軍、開成所の如きもの多くは頗る西洋事情の紹介に努めたるもので、仲々灰殻のものが多い。凡て當時の新聞は一枚物でなく、大概判紙十枚多きは十枚刷りの冊子で、表紙がついてある。謂はば書籍と新聞紙の混血兒だが、兎も角此時分既に新聞、新報と題名し且内容も是に副ふべく努めてある處からして先新聞の元祖と云つて差支はあるまい。此冊子体のものが變化して後に生れたのが一枚刷りの日々新聞だ。

此にあるは萬國新聞紙(慶應三年二月中旬頃)内外新報(慶應四年四月)で前者は備濱八十三番館の發兌、後者は

江戸にて刊行されたものだ。萬國新聞の表紙に英國國歌の『I sing the praises of my King』先生、定價三百銅、不許翻刻等の文字あり、中中には詳細なる外國洋行の道案内が書いてあつて、特に英國船の取扱が非常に宜しいと云つて居る。是非に勿論、用語杯が變つて居て、仲々に面白い。

加之、當時の人の頭では一寸解し難い耳新しい西洋語の譯語が多かつたので、其解釋の必要と、一つには新聞は社會を教えるものだといふ見解から、充分之を讀ませる爲め、本紙一冊に内外新報字類」と題する字引が添ひてある。此字類は本紙大の形で中が二段となり、各頁の初に何號何枚目表裏の索引があり、上には漢字下には假名が書いてある。例へば瑞西國なる文字の下に、割註平假名ですいっつると書いて

ある如く仲々懇切を極めてある。之は頗る珍らしいもので、之等を見ると當時の様も歴然と分り、また新聞記者の態度も分る譯である。時こそ替れ貴社の新聞でも、初刊當時のものを今見たからは、今昔の感に打たるものであらう。(姫峰配)

ナニ一寸變つた趣味の話が欲しいとか。變つた話と云へば幾何もありやうだが一つ大隈伯と美人との話を話して見やうか。伯は人も知る如く極めて謹嚴な人で、従て故伊藤公や其他の元老連の様に、婦人に關する逸事と謂ふものは誠に少いが、さりとして伯も美人嫌なぞではなく、相當賞鑑力を持て居らる。しかも事は君等の越後に關係のある話だから面白い。

伯が曾て新潟へ行かれた時、ソレは越後へ演説に行かれた折であるが、行形亨て有志の款待を受け、多くの婦人を見て激賞された。處が曾の若者共は

伯が御迷惑だらうと云ふので、宴會半頃に退席を願つたうである。伯は是を遺憾として「君等は我輩に退席を命し、自分等計りて美人を專にする」と云ふとは、餘りの所置だ」と今でも零して居らる。と共に、其都度越後美人を激賞して居らる。伯が美人の賞鑑力を有して、木石の如き野慕心ならざるは此一事にても分るではないか。

モソツと古いとて今一つの逸事がある。時は明治十年、聖上北越御巡幸の砌、伯が今の井上侯其他の大官連と共に鳳輦に扈從して新潟へ行かれた時だ。伯は頗る機敏の人であるから、宿へ着かると直に主人に命じて、土地第一流の美人三人を選つて捕虜として終つた。此時井上侯は確か八木氏の別荘かなにかに宿泊されたが、之も同じ考で美人を激賞する段になると、扱第一流は居らぬと云ふ。名に負ふ井上の上だ

美人の話が出たから、序に我輩の美人論を話せとか。是は少し面倒な注文だか。併し我輩も多少の意見があるから話してもよい。

人には新潟に美人が多い等と謂ふ者もあるが、之は産物だ。我輩曾て大隈伯と共に京都へ行つた時に、伯に向つて、京都は美人の淵藪だと云ふから種々注意して見當らぬと謂ふと、伯は「其の故、京都に美人のあつたのは遠く藤原時代のとて、現今はない」と謂はれ、續て伯は「美人は政權の存する處にある」と結論された。成程其通りであつて、政權の存する處必ず美人集る、是か原則に相違ない。今日の處、中央集權は東京であるから、全國のものか東京にあると云ふのが本體で、京都でも、關西でも、乃至中京の名古屋美人も、北國育ちの雪膚の美人でも、皆東京に吸収されてある。元來何處の土地でも、産物を出す處へ行つて見ると、

あるが、表情が其美をして益美ならしむる大原因をなして居る。一日に謂へば輪廓美や造作美や色彩美は第二條件で、表情美でなければ眞の美人と謂はれない。

●暫く此表情美を原則として我日本の婦人を物色して見ると、乍遺憾日本の美人は片跛と謂はざるを得ない。而して斯る現象を呈するに至るのは、主として日本の社會組織、教育制度及び封建武士の教の結果で、表情美は我日本に絶対にない

と云つて宜しい。元來日本と謂はず東洋流の嚴肅なる家庭の婦女子は、深窓の裡に垂れて外界に接觸せず表情を養成すべき機會を與へて居らぬ。加之封建武士の教として「隱忍」と云ふが大切で、之が爲に人

品質の第一流なるものは土地にない。是は勿論輸出の爲め、賣出すのだから當り前だ、米でもそうだ、越後は米産地だからとて越後の大農の宅へても行けば、非常に優等米を喰つて居るかと思ふと、ふけ米を喰つて居るのが多いと一般の理窟だ。

●一体美人と謂ふとに就ては種々なる説もあらうか、只顔の造作が良く整つて居るとか、輪廓がよいとか、色彩がよいとか云ふとを以て判断する者があるが、是は皮想の見解、淺薄なる判断で、最も大切なる要素を欠いて居る。成程造作や輪廓や色彩も、美人の要素たる一部分には相違なからうが、それ以上表情と云ふとが大切なる要件だ。

●例へば骨董品其他の器等に依てもそのうである、如何程精巧緻密の出来ても、其物に趣の有るものと無ものがあつて、趣のないものは何等の興味がない。人間も矢張其通り、如何程美麗であつても

の自然性を枉げ感情を壓迫し、喜怒哀樂凡て裏に隠して外部に顯はさざらんとを努めた爲め、其餘風今日に至り、處女の表情の如き絶無の姿となつたのである、况や外界接觸の機會なきをや。故に日本の婦人には輪廓美、造作美、色彩美の如きあるも、表情美は全く欠けて居る。

●但此に除外例らしいものが一つあるそれは藝妓である。仔細は東洋日本に於ては、素人の婦人が實際に於ては、一種の機關が必要となつて來ると云ふとは必然の勢で、此要求に應じて起つたものが古の白拍子現今に於ける藝妓である。是等は實際上の道具で、杯盤の間を斡旋し多くの人に接觸する處から、其境遇よりして幾分表情美を發揮して居る。若日本に表情美ありとせば、藝妓の如き範圍にあると思ふ、必ずしも其輪廓や造作や色彩が素人に比して卓絶して居る譯ではないが、比較的表情美に富んで居る。

ても表情の之に添はざれば、畢竟人形と撰ばんやである。即ち美人に趣を添ふるものは、全く表情の力である。

●英の儒碩スペンサーは嘗て其著美人論に於て「美人とは其人の美なる心の表に發顯したものだ」と云つて居る。即ち心の美の表に發顯した者でなければ美人でないとの謂だ。全く其通りで、如何程顔の造作や輪廓や色彩が整つても性質の悪い者だと可處かに底意地の悪そうな儼然らしい處が見えたり、之に反して柔和であるとか洒落であるとかすれば、温容玉の如く、光風霽月の如く厭味のない顔に見える、即ち表情の關係之を然らしむるので、表情の伴はざる美は本來眞の美ぢやない。西洋の婦人の寫眞や繪畫を見ると如何にも活々として美しく、殊に俳優が最も美なるは誰も知る處で

あるが、表情が其美をして益美ならしむる大原因をなして居る。一日に謂へば輪廓美や造作美や色彩美は第二條件で、表情美でなければ眞の美人と謂はれない。

●暫く此表情美を原則として我日本の婦人を物色して見ると、乍遺憾日本の美人は片跛と謂はざるを得ない。而して斯る現象を呈するに至るのは、主として日本の社會組織、教育制度及び封建武士の教の結果で、表情美は我日本に絶対にない

と云つて宜しい。元來日本と謂はず東洋流の嚴肅なる家庭の婦女子は、深窓の裡に垂れて外界に接觸せず表情を養成すべき機會を與へて居らぬ。加之封建武士の教として「隱忍」と云ふが大切で、之が爲に人

品質の第一流なるものは土地にない。是は勿論輸出の爲め、賣出すのだから當り前だ、米でもそうだ、越後は米産地だからとて越後の大農の宅へても行けば、非常に優等米を喰つて居るかと思ふと、ふけ米を喰つて居るのが多いと一般の理窟だ。

●一体美人と謂ふとに就ては種々なる説もあらうか、只顔の造作が良く整つて居るとか、輪廓がよいとか、色彩がよいとか云ふとを以て判断する者があるが、是は皮想の見解、淺薄なる判断で、最も大切なる要素を欠いて居る。成程造作や輪廓や色彩も、美人の要素たる一部分には相違なからうが、それ以上表情と云ふとが大切なる要件だ。

●例へば骨董品其他の器等に依てもそのうである、如何程精巧緻密の出来ても、其物に趣の有るものと無ものがあつて、趣のないものは何等の興味がない。人間も矢張其通り、如何程美麗であつても

の自然性を枉げ感情を壓迫し、喜怒哀樂凡て裏に隠して外部に顯はさざらんとを努めた爲め、其餘風今日に至り、處女の表情の如き絶無の姿となつたのである、况や外界接觸の機會なきをや。故に日本の婦人には輪廓美、造作美、色彩美の如きあるも、表情美は全く欠けて居る。

●但此に除外例らしいものが一つあるそれは藝妓である。仔細は東洋日本に於ては、素人の婦人が實際に於ては、一種の機關が必要となつて來ると云ふとは必然の勢で、此要求に應じて起つたものが古の白拍子現今に於ける藝妓である。是等は實際上の道具で、杯盤の間を斡旋し多くの人に接觸する處から、其境遇よりして幾分表情美を發揮して居る。若日本に表情美ありとせば、藝妓の如き範圍にあると思ふ、必ずしも其輪廓や造作や色彩が素人に比して卓絶して居る譯はないが、比較的表情美に富んで居る。

しかも昔は別として今日の藝妓は、品藻むげに卑しく、高雅な美を欠く者が多い。仍て考ふるに、今日の場合、素人にして品藻高く加ふるに表情美の伴ふもの、出来らざる限り眞の美人を見ることは先難いと思はねばなるまい。

●美人論で藝妓の話が出たから、透さす記者より「吉原趣味」はと問ふと、趣味先生莞爾として更に長廣舌を揮はれ「吉原趣味か、是は奇抜な問題だ。扱吉原と云ふ處を只淫を囂ぐ處、卑猥な場所と計り解釋する者あらば、并は實に大なる誤解だ。今日歴史的研究より考ふれば、封建時代の歴史上の大なる研究問題に屬すると思ふ。元來吉原に就ては何れの時代に於ても遊里の公許の己を得ざるは、人の性慾の壓抑すべからざるもので、夫には私娼よりも公娼が勝つて居るからだ」と云

て居るからだ」と云

●見解を下すのが普通であるが、我輩の見る所では夫よりも一層深い意味があると思ふ。過激の議論かも知れぬが、我輩は徳川氏の太平を維持する爲め、當時の大經綸家が深く思を致したとて、幕府の命脈の維持として之を許したものと考へて思ふ。●封建時代の階級制度は今改めて謂ふ迄もないが、實に幾階級もあつて平民は其最下層に存在し、絶えず上層から壓迫され、何れの階級にも頭が擧らなかつた

免だなど云つて、丸て犬猫と同様であつた。斯る待遇を受ける平民が、不平鬱勃たらざるを得ざる自然の勢ひで、何處かに此不平を漏らすべき場所なかりせば、竟に勃發して徳川政府顛覆の大事をも起し兼ねぬのである。まな一概に平民素町人と謂へば、卑しい者の様に思ふが、其實力に於ては諸侯を壓するに足る底の者が幾人もあつた。財力、學力、智力等に於て、諸侯の下風に立たぬと云ふ様な人物が澤山あつた。去れば是等の人々が其不平を抑ふると能はずして、破壊運動を惹起したならば太した騒になつたであらう。然るに徳川氏は何等の支障なく三百年の太平を維持した。斯る太平は外國にも先例なきとて、全く世界の奇蹟である。於て是か吉原が必要になつて来る。吉原は其奇蹟の秘密を開くべき凡ての鍵

でない迄も、確に其一たるを失はぬ。●吉原は一口に今の言葉で云へば自然主義の行はれた處だ。茲に云ふ自然主義は性慾問題の自然主義の謂ではなく社會の階級を見ずるとを指すので、即ち「腕づく」の場所であるといふ意味だ。大藩の大諸侯も此廓へ足を踏入れた。が最後、力づくでなくては叶はぬ。さるからに匹夫と諸侯とが争ふて、匹夫爲に一著を輸したと云ふ様な事は昔から幾何も傳つて居る。表に於ての階級は此廓には通用せぬ。凡て實力の勝利に歸する譯であるから、全く治外法權の別世界であつた。

●次で當時の遊女は決して今日の眼を以て考ふべきものではない。何分にも諸侯若くは其と同等位の人物を相手としたものだから、品藻、風采、見識等堂々たるもので卑しくなかつた。加ふるに江戸式封建式の氣概を養ひ、一死を賭して情を狂けさる氣節を持って、所謂威武にも屈せざる氣風があつた。

故に己の欲する處は匹夫の賤にも萬腔の愛を捧げ、己の好まざる處、王侯の貴も之を斥け、若己を得ざれば一死以て其節を全ふす、之が實に平民の渴仰措く能はざりし處で、外部に於て常に壓迫を受けつゝある上層の階級に對して、復讐的に腕を伸すは全く此廓計りであるから、不平ある者は皆遊里へ來て、大藩の諸侯と角逐し、屢々勝を制して鬱勃の氣を漏らした。

●今日に於ても遺風が少しはあるが、凡ての設備は大名式であつた、巍々たる高樓に何百疊の大廣間があるが如きも大名の設備だ、遊女の調度類、金細縮緬の三つ蒲團、蒔繪づくめの器物の如き、態度の應揚なる、客の上座をする、荷も人の中に於て輕卒にも言はぬ。凡て大名式である。若夫所謂道中なるものに至ては、多數の伴勢を引連、堂々と練り、自分は盛装して八文字を踏む、此八文字の如きは幾何も解釋の仕

様はあらうか、兎も角其歩行方は「瀟歩」の態度、即ち大名の態度をなすものである、平民が是に至りて快とするは全く「臨時一日大名」となる點にあるのだ。之は廓外に於ては決して許さざる處で、爲し得ると此廓計りである。勿論初葉は大名等が遊に來たから設備の之に伴ふ様になつて來たかも知れぬが、後には全く平民が主となつた様だ。此鬱勃の不平を感めたとは、徳川の命脈には緊要なるものであるから若是が考へられたものとすれば正に大經綸家の業であらうと思ふ。

●且夫、前にも一寸述べた通り、徳川三百年の太平無事は世界の歴史に類のない所で、其結果文藝の勃興を招來し其燦爛たる有様はまた世界に稀なるものだ。處が、文學美術の三四分は此廓から起つた。所謂軟かい性質の文藝、即ち小説、音楽、彫刻等凡て遊里を中心として起つたものだ。是には種々な

る資料も澤山あるけれども、今は後日のととして文藝史の上よりするも、吉原の研究は忽にすべきものではない。従て将来是等の諸點に着眼して真面目の態度で研究するものが起つて來ると思ふ。(原峰記)

●今日は「追懐の趣味」と云ふとに就て話さう。凡て古物の味は必ずしも其物が精巧なる美術工藝品でなければならぬの、文人墨客の手になつたものでなければならぬと限つた者ではない。近くは、國民新聞主催の維新志士遺墨展覽會だ。或人はアノ會の陳列品を見て「壯士遺墨展覽會」だと評した。成程陳列品の中に、未だ眞熱せぬ人々の書いたもので、反故同様のものも多かつたから、若個々に其作品を點檢せば太したもののないの當然で、壯士遺墨展覽會とは面白い。乍併味は追懐の趣味に就てある。先其昔是等の人々が國事に殉したる事實を念頭に置いて、眼前に其人等の揮灑手澤を見ると、成

程當時は斯る意氣があつたとか斯る風尚があつたとか、追懐の感想に就て油と趣味が湧いて來る。同新聞は非常なる成功を収めたの謂ふが、若其成功は追懐の趣味を興へた點にあると思ふ。

●此に追懐趣味の材料が二つ三つある。と云つて主人は座にある骨董三三點を記者に示し其一二に就て曰く……此通五枚の茶椀恰好の物で「夜舟」と云ふ銘がある。之は故益田克徳君が非常に珍蔵したものが、死後自分の手に入つた。之は徳川時代の昔、淀川の通船に「喰はんか」と云ふて物賣か物を賣て歩いた器物で、漸く五つを或好事家が採り當てたものだ云ふとは此にある由書でも分る。

の折ふしに夜ばなしのまらう人もうけにはいと興ある品をれば故よしなしし置ぬ。●此品を見ると呉須の色でも乃至土の色でも、染付らしいもので、直に唐物と思はるゝ位であるが、事實紀州の男山で焼いたもので、是は陶器の上よりしても稀有のものだが、それは別として「喰はんか船」の昔を追懐する處に無限の感がある。今日てこそ汽車汽船の便ありて、千里江陵一日歸の有様であるが、當時に於ては目と鼻との間に於てすら、淀の夜船の上り下りに任せ、龍夜の春の宵、肌寒き秋の夜、越人吳客一船の裡に雜居して夜半の夢も結びあひず、諸國思ひの話しまざらしかして居る中に、其話も絶えて退屈し切つて居る處へ、推賣式の物賣が古風の言葉で「喰はんか」と賣來るを、我勝に争ふて買ふ様迄、歴々と見ゆる様だ。是が追懐の趣味だ、假令器物其物は格別の品でなくとも、其時分の追懐する。是が書畫骨董に附帶する第一の條件である。

●次は矢張故益田君の遺愛品であつた此人形手の支那の青磁の茶椀だ。之は足利時代泉州堺の繁榮當時に、支那から持て來た船が覆没したので、七八十年前淡路嶋の由良の海底から漁夫が曳上たものだ。斯る由來のある他、嬉しむとの傷が底に附着てあつて、少しの傷がないのだから、何れよりも面白い者であるが、それは別問題として今は謂はぬ。只之が追懐の種となるのは、此器物に對して當時の堺の港が思出され、今日形のない昔の繁榮が忍ばれるとだ。次では當時の敷寄者が斯る高雅な茶器類を愛したことから、其人々が貿易船が何日頃と指折敷へて切りに待

て居るのに、遂に來らずして海中へ覆没したと聞き、如何に失望落膽せしか等の追懐せられて、非常に趣味がある。●第三には此に天目臺がある。高き殆ど九寸位巾之に適ひ、細い處に朱漆で一方には「東三軒茶屋」反對の方には「中村屋」と書いてある。中村屋は京都嵯峨の有名な茶屋であつて、天目臺には年代は顯はしてないけれど、朱漆の書體やら何やらで一見元祿時代の物だと云ふとが分り、此器物に依つて當時悠長なる時代の有様をも想像する事が出来る。嵯峨や御室や嵐山、花に月に浮かれ遊ぶ都人等が、東三軒茶屋の中村屋で休んだ折、茶此臺に載せて進めたのは忍くは何百

人何千人であつたらう。其中には盛閑の精神もあらう、有名なる文人墨客もあらう、花も恥らう美人もあらう。斯くして今に於て歴史中の人物等を聯想すると、是元祿時代の参考品とするよりも追懐の趣味に於て重要な價值を有するものである。●大丸呉服店で服装の展覽會をやると云ふので、我輩杯も聊か參謀をやつて居るが、之は從來有觸れた此種の展覽會とは、多少異つた趣向をと云ふ處から、大隈伯に請ふて、伯一代の悲劇たる、條約改正事件遭難の時の服を出して貰ひたいと云ふ譯で、伯に願つた處か、早速承諾され、出さるゝこととなつた。處が、此服を大丸に持込だ日は、偶然ではあるが、帝國議會に外人土地所有の法案が提出された日であつた。スルと東京新聞中の心ある者は、此事を傳へて、大丸にては云々のとをやるそうだが、其服は是非小村々相に示し

たいと記載たものがあつた。之は誠に妙のとだ。

●我輩は、伯遭知の際には田舎に居り、其時の有様を目撃せず。又今日迄其服を見たともなかつたが、今此機会に於て親しく見ると、寫眞の通り外套の前や袴の裾が寸断され、且服一面に鮮血淋漓たるもので、實に慘鼻の極で、當時のことが思出さる。

●顧ふに今日の議會に提出された外人土地所有の法案は、今より二十年前に於て、大隈伯をして此危険を敢て受けしめたと同様の案である。然るに今日の議會にては、近く来るべき條約改正の準備に於て通過の形勢あるを見て、誠に今昔の感に堪へない。此感想は單り我輩計りてはあるまいと思ふ。(廻轉)

●先達の美人論に附帶すべきとして、少し言漏したともあるから、順序が前後したけれども茲に補足して置かう。一体美人は時代精神に伴ふもの、即ち一

世の風尚に依て美人其者が變遷するものであるから、其時代を見

ると分つて来る。例へば藤原時代若くは元祿の如き、世が泰平無事にて、人間が性慾を専らにする時の美人は之に相應する様に出来て居る。藤原時代の美人の眞相は、文献の徴すべきもの趣を以て暫く措て問はぬが元祿時代に於ては、繪杯に依て見るも凡て濃艶濃粧を喜び、顔の如きは豊頬を尊び、白粉べつたりて紅杯を點し、衣類でも頭髮でも凡てコツテリづくめて有た。

●乍併一代に其風潮が行はるゝと之に對する反動が來て、纏て前の事を打破して反對の風尚を惹き起すもの

て生れ來つたものだから敢て怪むに足らぬとだ。

て、其結果竟に文化文政度の所謂美人(黒人)を生出した。濃艶濃粧の風、紅白粉、豊頬の顔は今や鼻につき、好尚は極端から極端へ馳せて、凡て淡粧した風を尊び、態と油氣のない洗髮杯を喜び、顔は寧ろ細そりとし

た、極端に評せば貧血症の様なものを愛し、從て衣服の如きも地味な洗い處を尊ぶ様になつた。之が矢張文化文政當時の時代精神から來たものである。

●人も知る如く此時代は文人の跋扈した時で、繪畫の如きも南宗畫の盛に行はれた時であるから、所謂通人の輩は美人に對しても枕席を共にする性慾主義よりも、寧ろ氣合とか、意氣地とかを愛した譯で、即ち美人の風尚は、一面に時代の精神を代表するものであるから、美人を論するには必ず先其時代を見るのが肝要である。然らば將來の

美人は何うなるかと云ふに、素人美、黒人美共皆夫々長所があるから、之を合せた上、各時代の長所を集めるとが必要であらうと思ふ。

●て、是等のとは左迄困難のとはないが、最も困難なるは日本美人の一大欠點たる體格のことで、昔は知らぬが、今日は誠に不完全極まつて居る。夫は名ある女優が日本に出来ないとでも証據立てるとして、之は全く體格不完全の致す處である。日本今日の婦人では、如何程能く工夫したとて、舞臺へ登せては丸で小兒の如く少しも見榮がせぬ男優が女子に扮するの己なき、はた日本婦人が西洋婦人に對して遜色ある等此體格の欠點の然らしむるのである。前に述べた如く、各時代や各種の長所美所を集めるとは左迄困難ではなからうから、比較的早く目的を達するところが出來やうが、扱體格美の完成は、時間の上にも方法の上にも非常に困難なる

とであるから、是が發達せざる間は、未だ眞の美人を望むとは出来まいと思ふ。

●我輩も山陽癖だが話の序に今日は山陽の点を少しく話そう。山陽には殊に感心の點が二つある。第一に畫贊を作るとだ。元來畫贊と云ふ者は頗る六ヶ敷い者で、贊が畫と重復したり、或は漸とのとて畫に因むと云ふ様なのが多くある。處が山陽に至りては才氣縱横にて贊を以て畫を發揮すると殆ど痒い處に手の届くより以上、畫の力及ばざる處迄贊で發揮して居る、今適當の例を即座に挙げるとは出來ぬが、稍や是に近い例がある。それは先日或友人の處で見た山陽の小點で、美濃紙一枚に殆ど餘白がない程の山を描き、其贊に就小幅作大山如大丈夫困於小官也と書いてある。如何にも小さな紙に書切れぬを餘程骨を折つた處も見え、又

大人物が腰辨當に屈する時世を諷した意味もあつて一寸面白い。敢て山陽の畫贊の標本と稱すべからざるも、其妙の一端を説明するとが出来る。

●第二に感すべきは山陽の書簡だ。山陽は春水の如き父を有し、梅腮の如き婦人てこそあれ男勝の明文名筆の母を有し、香坪の如き叔父を有する處から先天的に親の血を受けたる爲め、其文章の卓絶するは勿論であるが、特に書簡に於ては近古學者の隨一と稱すべきものだ。尤も山陽も中年以前の者は漢文と俗語と調和しなかつたが、中年以後に至るとは全く調和が保たれて居る。六ヶ敷漢語が出て來ると思ふと、忽にして俗に碎ける處なやが最も妙だ。●世上多く沙翁、近松の文章を激賞するが、それは時に莊重典雅する韻文を行き、朗々語ふべきものあるかと見れば、忽にして一轉世話に碎け、非常の俗となる處か妙だと云ふ點にある。山陽の書簡も全く其通りだ、山陽か漢文

交りの文章の妙は、此一體を形つくる
流派の元祖として恥かしからぬもの
今此にある一通の如きも頗る面白い
西之宮より一書歸京の上も一書差出
香然不得後報如何哉と存奉候御
魚問救被下度何銘の酒にてもよろし
候追々火濃く相成候時節と奉存
候其病さへ御吟味被下候へばよろし
く昨夜の詩

酒醒後挑燈、小窓開雨霰、晝日
昏
昏換幾面、夜與古人始相見、古人
堂々舍我行、不知鬢眉作廢生、獨
留數行手痕在、吾見其心頗分明、
恨不古人復生出今、却質吾儂此時
心、
狀あまり薄く候故狀かさの爲に認乞
桑政候何分此篇首一字を奉煩
候也頓首
十一月八日
原左一郎様
酒くれる主によるしく拙書氣に入
らねば書改可申候ケ様の事終に
云ぬ男酒故なればこそ漸汗々々

交りの文章の妙は、此一體を形つくる
流派の元祖として恥かしからぬもの
今此にある一通の如きも頗る面白い
西之宮より一書歸京の上も一書差出
香然不得後報如何哉と存奉候御
魚問救被下度何銘の酒にてもよろし
候追々火濃く相成候時節と奉存
候其病さへ御吟味被下候へばよろし
く昨夜の詩

之は漢語を採録して俗調と調和する一
であるが、中に狀が短促るから嵩を
増す爲に詩を加へたと云ふ處から殊に
酒を請ふ爲だから初より其事を一貫せ
しめ居るも、また卑陋の態なく、ケ様
の事終に云ぬ男酒故なればこそ」と品
良く自己の地步を占めて結びたるが如
き、山陽の氣風が顯はれて頗る面白い。

●山陽の書簡は決して形式に泥まぬ。
凡て百通百様の體がある。時と所と人
とに對して皆夫々活躍して居る。世間
多くの書簡は形式的の者で、用事のあ
る一部分を除けば、何處にも適應する
型だが、山陽に至りては、其目的の他
には何れにも通ぜぬ、是か書簡の上乗
なるもので、紋切形にて、印刷して置
いて用のある處丈書入ればよいと云ふ
様な下劣なものを以て山陽の書翰に比
較せば、雲泥霄壤も留ならざる相違が
ある。

●山陽一体の文體は漢文に於ても其他
に於ても凡て寫實的で、日本外史を讀
んでも分るが戰國の記述の如きは、丸
て錦繪の趣がある。若之を西洋の文豪
に對比すればマコレー卿と好一對だと
思ふ。既に寫實的なるが故に漢文に於
ても日本の俗語を用ふるを適當とする
所には、そう云ふ風に閉ゆる様な言葉
を用ふる。無論書翰もそうである。一
俗語は人情を寫すには大切なもので
あるが、此呼吸を能く會得して野卑に
流れず冗慢に陥らざる様に、巧に俗語
を採録したのが山陽だ。其例は此に掲
げてある類にもある。

(全文略)入京寺町をスタクくとあ
るくと鳩居堂より申し先生御歸に成
ましたか備中より書狀送て居ります
と云受取て見れば倉敷より返り候京
信也持歸妻に返し候大咲
宛然光景を眼前に髣髴せしむるのだ。
●山陽は時に滑稽もやる。處が其滑稽
も仲々品良く行つて、如何に鹿爪らし

い人も破顔一笑を禁し得ざる妙があ
る。嘗て何處かへ遊に行く相談で、畫
家百谷への書簡を書了り、其末に
ツイ巻紙大分損仕候是も今日の
雑用の内に可相成候かし
とあるなどは人をして抱腹大笑せしむ
るものだ。全体山陽は經學者道學者に
もあらず、夫子自ら通人て、其上趣味
を解する人であるから、萬事面白く行
くは無論のこと。況んや書簡には大切
な書に堪能にして、書簡に熟して居る
上、詩も大家で畫も黒人を壓するをや
だ。山陽の長所は他にも幾何もある
か、我輩の殊に感心したのは此一點に
あるのだ。(麻酔記)

●此頃犬養木堂に逢つたが、木堂は我
輩と談する時には殆ど極まつた様に書
談をやるので、此日も御多分に漏れず
書談が初まつた。其中に佐藤一齋の話
が出る。木堂の曰くさ「一齋も老境に
入てからは手が慄へて垂直に引張る棒

などが甘く行かないので、其場合に
ると周章しく門人を呼び定規を持來ら
しめ、之を當て、棒などを引張り、且
つ低聲門人に曰くさ、斯んなとを世間
に謂ふてはならぬ……」
●一齋と云へば偶然だが此に一齋の妻
君自筆の日記がある。之は嘉永辛亥正
月に作つたもので、見らるゝ通り奉書
の反古三十枚計りを長目の帳面に綴ぢ
標題も書出も一齋の筆で、中にも一寸
いゝ書入があるが、大部分は妻君の
筆で、良人のところが重に書てある。元來
婦人の日記と云ふ者は少いものだから
極めて興味がある。

●中に一つ斯う云ふ處がある。或時良
人の許を得ずして妻君が淺草へ參詣に
行つたが、其時出先の具合で歸りが遅
くなつた、スルと良人は御機嫌頗る宜
しからず大きに困つたと書いて、其次
に夜分になつて漸く機嫌が直つたと書
加へてある。或奴が我輩の處で此日記

を讀んで、趣味は此に在りと云つて呵
々大笑したハア……
●此頃内野五郎三と云ふ人の處へ遊に
行つたが、此仁は藏幅家で種々のもの
を見せられた、其中に容齋の西行に藤
田東湖の贊をしたものがあつたが、其
來歴が頗る面白い。之は鈴木鐵藏と云
ふ人が東湖に贊を
求めた處が永い間
に鼠が喰つたので
詫書簡を添へてや
つたので、贊より
も書簡の方が捨つ
て居る様に思ふ。

一笠飄然忘此生。
銀猫幸勿惹虛名。
人間何物堪有愛。
唯有芳山千樹櫻。
口上(鈴木鐵藏宛)
過日は御枉臨被
下候處折悪く失
敬仕候西行の
贊乍外延引殊に

ねつみくひ出来
重々多罪何分よ
ろしく御中詳可
被下依

名僧の衣にふ
れし甲斐あり
てねつみもと
らぬ猫をめて
御一咲可被下候
週々

九月廿八日
認置

再啓尊大人何哉乍憚宜敷能傳
被下度候
之も内野と云ふ仁の話だが、高久隆
古が佐竹永海と隣合せに住んで居た時
に、永海の家には日夕書を需め来るも
の相踵ぐの大繁昌に引替へて、隆古の
方は前雀羅を張るの有様で、從て窮
乏謂ふ計りなき爲体であつたから、隆
古常に「永海の様なくならぬ書をもと
むる馬鹿者もある。あれに遣る三分の
一の謝金を己の處へ持て来れば、二三

趣味談叢

雙魚堂主人談
(禁報)

○先日岡田朝太郎君の
岡田君は法學博士で刑
勿論、支那の新刑法の顧問
法者として彼地へ行つて居るとは普く
人の知る處であるが先達支那の正月休
て歸朝つたと云ふので訪ねた譯だ。此
先生元來の趣味家で仲々隠し藝がある
故尾崎紅葉杯とは莫逆の間柄で、文藝
の嗜好深く、號を虚心と稱し夫子自ら
小説を書くとなぞを知て居る者は知つ

倍面白繪が出来るものを、盲目の多
い世の中だと嘆息したそだ。また
華山も生前には俗物共に其技倆が認め
られず、時に華山に依頼して可庵武潤
の畫を書いて貰つたものさへあつたと
謂ふ。但し武潤は畫に於ては文晁門人
てはあるが學問は文晁よりも優れて居
つたから、學問に於ては文晁の師であ
つたそな。 (順峰記)

あるが、就中最も貴いと思はるゝもの
は、神龜元年の刻字ある交脚彌勒の駄
鳥に乗つて居る塗金像、武平二年の刻
字ある塗金像の觀音像は、共に二尺許
りのものだが、之は實に稀代のもので
恐く日本に於て見るとの出来ぬもので
岡田君は數月の月給を棒に振つたと云
ふから、此二體で三千圓も出したに相
違なからう。兎も角此佛像趣味は君の
隠し藝中第一と稱すべしだ。

○續ては此虚心先生、學生時代から川
柳趣味に富み、夫子自ら吟詠を試み、
堂に入居るものも趣くない。ソレで
川柳に關しては書籍に依らず何に依ら
ず凡ゆるものを集め、其蒐集の廣くし
て種類に富める是また驚くべきものだ
川柳の書杯は一時廢つて終つたのだ仲
々集め悪いものであるのに、此先生許
りは古くからのものが書齋に充ち満ち
て居る。斯道に於ても恐く他に肩を比
べるものはあるまいと思ふ。兼て嗜に

は開て居るが、實際を見て一段と驚い
た。岡田君の川柳は、曾て版にしたも
のもあるから、一寸五六を抜て見やう
警官の究所へは國訛
ヨボ／＼の車夫大聲に話しかけ
職工はズボン、マンテル高あしだ
異人帳といふか出雲で前に出来
植木屋は負ける前には舌打し

五六間行けばまけたと手を敲き
見合のと知て寫眞屋念を入れ
どうしても寫眞の方は落すすよ
講義録大改良大部分は紙型也
公園のプランコ乳屋撰手なり
親睦會舊知已許り親睦し
解散はアイヌの方が先へ知り
我馬鹿を三圓に賣る投票紙
禁酒會五分は元來飲めぬ奴

趣味談叢

雙魚堂主人談
(禁報)

○一室中のものでも約百体計り。大な
るは二三尺位のものがあるが、五寸位の
小さいのが大部分を占めて居る。之は
實に目を驚かす程の珍らしいもの。一
點と雖も日本邊では容易に見るとの出
來ぬもので、例へば六朝若くは其前位
のものさへあり、唐代のもの杯と來て
はザラにあると云ふ譯である。夫子の
謂ふ處に依れば、三年間の蒐集既に六
百點に達すると云ふから、我輩は歳つ
て曰く前途千體に達する日は遠くも
あるまい、其際には何れ堂を建て、千
體佛安置のとなるであらうから、我
輩は君に「千佛庵」の號を奉ると云つて
笑つた。
○斯の如く非常に珍らしいもの許りて

○前編男爵は本年一月と云ふに急の思
ひで薩摩へ行かれたが、男は今回の旅
行は愉快であつたと見え、豫定よりも
二日計り餘分にかゝられたと云ふこと
だ。元來男と薩摩とは頗る因縁のある
とて、維新前鹿嶋藩に於て英學を創め
た時に其第一の大先生として迎へられ
たが即ち此前嶋男で、非常に藩に於て
畏敬されたものだ、其當時の一つの奇
談がある。或時藩から禮服にて出立せ
よとの差紙が來たので、男は何事かと
思ふて袴にて出頭すると、藩の重役
が、時に御身は藩の洋學の先生なれば
御家に秘藏の西洋に關する寶物を見せ
るからと云ふて、大きな函を恭しく
持て來た、見ると蓋は二重三重で、如
何にも勿体らしいので、謙て蓋を開い

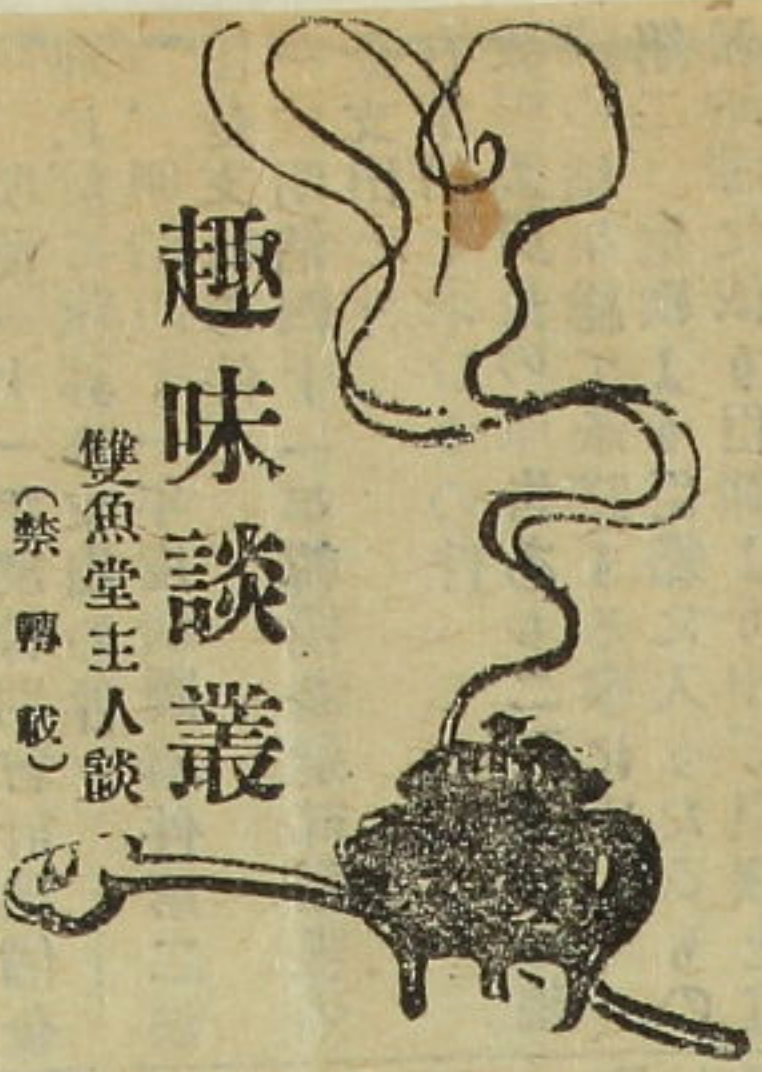
て見と豈圖らんやウエブスターの大字
典ならんとは、勿論當時は同書の出版
されてから年數も経たぬので、多少は
珍とするものであらうけれども、藩に
於ては何か何だか分らぬが立派な体裁
のものだから珍蔵して居たのだ。男は
餘程の重寶だと思ふた處が、毎日自分
でも使用して居る字典であるから、心
の中ではオヤイと思はれたもの、去
りとして其好意に對してもと、恭しく禮
をされたと云ふのだ。
○次には男が人に向てもよく話される
とだが、男は其昔非常の大酒家で、よ
い加減の量では酔が發しなかつたそう
であるが、是にもまた大に仔細がある
指折敷ふれば既に四十有餘年の昔。時
は維の境目に於て、官軍が徳川の倉
庫と云ふ倉庫を皆封じて終つたので、
哀れ幕府方は何をすることも一つ自由
にならぬ究境に陥つた、當時前島男は
其經歷上官軍側の所謂志士連中にも交

際あり、又徳川方でもあると云ふ處か
ら、其間の周旋役に當つた、ソコで男
の役目は新政府側の要路と親しむのが
任務であるから、其御機嫌取の爲に常
に酒樓で饗應する、先駐春亭あたりで
酒陣を張り、興酣にして玉山將に頼れ
んずる頃ほひを見計ひ、扱北國征伐ち
やと計りに吉原へ行く。遊興も毎日と
なつては辛いものだとは男が其時にと
を思出されて、現今でも謂はるゝが、
終には酒が少しも乗らなくなつて來る
去とて酒氣がなくては思切つたとも云
へぬので、遂には山葵を焼酎の中へ混
じたものを、コツプで煽り、酒氣を誘
ひながら奮闘を續けた。
○其の如く殆ど懸命に要路の人の御機
嫌を取つても何かの機會に「時に幕府も
……」と云ふと相手の調子がキツパ
リ變ると云ふ譯で、幕府方の窮状を訴
へるとが困難である。そこで種々に工
夫をして、或時は先の敵娼と謀し合は

せて、先之を袋中へ誘はしめ、時刻を
見計ひ男自ら杯盤を持って部屋へ行くと
流石に武士氣質で先生ガバと跳起んと
する處を「ア」と押鎮め先一杯と云
ふ様にすゝめて御機嫌を取るやら、慘
憐たる苦心を極めた處が、漸くにして
意解け、イヤ俺どんも心配しつちゆる
かと云ふ様になつて來て、意志日に疎
通し、遂に萬事都合よく行くべし端緒
を開いたと云ふことだ。男は、其時我
輩は酒を以て國家に殉する覺悟をした
と謂はるゝが、全く苦心の程思遣らる
（未完）

趣味談叢

雙魚堂主人談
(禁傳載)



◎前嶋男に就ては尙話すべき逸事があ
る之は明治政府になつてからのとて、
田安龜之助様即ち現今の徳川家達公が
徳川家の相續をされた時、政府へ初見
參の爲め前嶋男が同伴をして江戸城へ
登城された。當時龜之助様は未だ漸く
六歳か七歳で、羽織袴の扮装にて徒歩
で登城されたが、流石に幼少のととて
男に此處は何處だと問はるゝ。當時は
徳川の倒れて間もなく、人も我も昨日
の有様を忘れやらぬ時で、之が世が世
なれば江戸の大路を行列美々しく叱喝
の下に往來し、萬人仰ぎ見るものなき

權威を持たると身分が、如何に世が變
ればとて、徒歩で手を引かれて、自分
の住居たるべき處を何處だと問はれた
時は、腸寸斷の思がして先立ものは涙
であつたとは、男が現今でも感慨の一
つである。

◎次で男に武藝のたしなみがあられた
かを問ふた。處が男の曰く「イヤ我輩
は武藝等はやらぬ、併し維新前後の形
勢としては到底盡の上では死なれぬと
決心したので、眞逆の時の用意に刀の
吟味位はしたものだ。何でも愈々刀を
使ふと云ふ時には、敵手が死ぬか此刀
が倒れるかと云ふ場合であるから、長
いものでなくては先へ届くまいと思つ
て、刀は長さを撰み、また場合に依つ
て、刀は必要だと思ふて成丈切味の良

文部省の行

早稲田大學圖書會

さそうな短刀をも撰んだ、との話である以上前嶋男の逸事は今ホンの思付いた二三に過ぎぬが、未だく澤山あつて、世に顯はれない趣味ある事實もあるが、之は何れ日を改めて記すとしやう。(編註)

趣味談叢

雙魚堂主人談
(禁傳 駁)

○ナニ蜀山人のどに就て話がないかとそれはあるさ。元來蜀山人のどは世間に幾何も傳つてはあつたが、大體誤解して居る様に思ふ。即ち世評の如くんば其狂歌を以て聞えたるよりして、諧謔洒脱の人、意氣な粹な磊落な人と許り思つて居る様であるが、我輩の觀察に依れば、蜀山人は全くそんなでなく、餘程綿密な頭と手を持つた人で、無頓着杯と云ふ人てなかつたとは、書道してあるものに依つても分る。それには一つ二つ標本もある。

たがあるが、其時の會計日記を見ても如何にも周到なる事務家であつて、狂歌で阿々や笑ふて居る様な人ではなかつた。それで自分が大坂に久しく居ると云ふ關係から、當時長崎の外國通辭をして居た弟を江戸の留守宅へ呼戻して、毎日若くば隔日に書簡を送つた其書簡は半紙に書き第何何と云ふ様にして、一家の私事に關する注意やら、大坂の事やら乃至文藝に關するると等百般に亘り、雅俗相半するものが書いてあるが、凡て一定の紙を撰み、綴つて保存し得る様にしたもので、之が殆ど數冊をなして居る。此一事よりして見るも、決して即興の事てやる様な人てないことが証據立られる。

○また此に「一本草」と題する寫本の二大冊がある。之は蜀山人の宅で藏したものだ、我輩の手に入つた。此通り巻頭に蜀山自筆の序文もある。此寫本は嘗て蜀山が幕府の命で、世上に埋没せし孝子義人の遺蹟を闡明すべく「孝義録」と云ふ書籍を編纂し官版にて刊行した時に、其參考にもなると云ふ處から自宅で雅文の研究會を開き、當代の名流多く相集り、月並風に種々に書いたもので、それが各原稿の儘二冊になつて居る。書手は廿五人許り、何れも蜀山と親しい交りのあつたもので、即ち六樹園(石川雅望)、曲亭、琴、唐衣、橘洲、小嶋源之助、談洲樓馬、北川真顔、尾代弘賢等の面々が寄つて、題は多く江戸の年中行事に取り、銘々が二つ若くは三つ許り書いてある。それを蜀山が自ら序文を書き製本して持て居たのだから、實に趣味あるものであるが、一面より見れば如何にも其用を周到なる處が窺はれるではないか。

蜀山人の遺墨



狂歌を見ると、蜀山が微毒に罹つたと呉れるから、それを賣て歩行けと云ふが書てある。此點は世間に傳つて居る蜀山の一部分を説明して居る。

○それから「一語一言」杯にもあるとて其燈籠は傳はつて居らぬ、處が我輩

蜀山に永く使はれたとのある僕の某が生計に苦み度々蜀山から救うて貰つたが、或時は盆の時節に急を訴へて來たすると蜀山は、乃公が盆燈籠を書いて

の所には、其燈籠に貼つた紙がある、即ち此通極薄の紙で、魂祭の俳句がある。之は東京廣しと雖も殆ど他

本日より
照演する
録

に見る能はざる珍らしいもので、我輩自慢の一品だよ
(編註)

趣味談叢

雙魚堂主人談
(禁傳 駁)



○奥平謙輔のとを一寸評さう。奥平は明治の叛臣とあつて、日外の志士選墨展覧會にも出されぬものであるが、我輩は多少縁故もあつて調べて見た。乍併アノ人が佐渡に於ての逸事の如きは越後人が能く知て居る處であるから述べぬが、茲に長州の人で、藩中の傳を調べて居る人があつて、奥平のとを談したからそれを語らう。

○奥平は未婚の人かと思つて居る。處がそつてもない。傳ふべき話はそれに

就てである。元來奥平は袴もはかず羽織も着ず、常に單衣、兵兒帶、大小と云ふ扮装にて世事に關せざるが如き態度の人であつた。乍去仔細に此人の事蹟を調べて見ると、單に悲歌慷慨計り事としての人はなく、全く一種の經世家であつたとは、僅か一年も佐渡に居らずして、今日經營の大眼目として居る處へ着眼し、既に其幾分を實行してあるとでも分る。

○面白きは奥平が郷里に於て結婚する時の奇談だ。奥平が結婚すると云ふ話を聞いた友人共は、アノ男のどから定めて向に構ふまいから注意してやらうと云ふので、奥平の處へ出掛けて行つた。案の如く貧乏徳利を出して膳には何も無い。そこで友人共は口を揃へて、お前の磊落も宜しいが結婚は人間一代の大禮だから、此際丈は注意しろと思告すると、奥平は「俺も心得て居るから今日の饗應には大に心を籠めてある」と濟ました顔だ。更に友人共

が、併し見受くる處甚だ殺風景ではないかと云ふと、「イヤ自分の心は腕の中へ籠めてある」と答ふ。そこで腕中に何かあるかと蓋を取て見ると、中には黒い様な米がある計りだから、連中大に呆れて居ると奥平は「是は今日の大禮の爲に特に自分が搗いた米である」と云ふたそうなる、些々たる事のやうだが、兎に角奥平の性格の或部分を寫して面白い。

○ナニ水戸の計がないかと。元來趣味は水戸には不足だが、茲に一つ語るべきところがある。それは烈公に關するのだ。烈公が自分の一族に一つの器物を作り與へ、必ず之を銘々の席に入れて置けと命じた。之れは銅で作つたもので、片方には鶯鴉があり、傍らに農夫が地上に座して居り、農夫の前には笠が置いてある。之れは烈公が工風したもので、之に

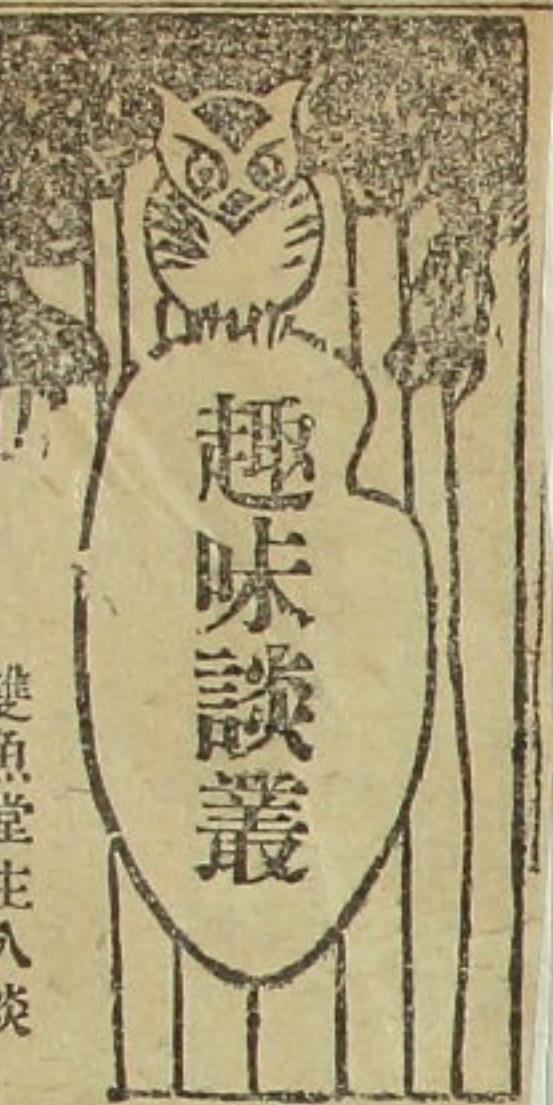
である。三度の飯は百姓のお蔭だ、其意味を知らぬてはいかぬ、故に先飯の前には必ず其二三粒を初穂として此百姓の處へ進め、然る後に喰べるととせよ」と命じたのが此器物で、烈公の逸事中の美談となつて居る。大名であつて農民に如此同情心を持つたと云ふとは感ずべきとて、また一面より見れば烈公も一種の政略家で、農民の功賞して奨励したのかも知れない。兎も角斯る心底の貴族は當時に於ては極めて少かつたろうと思ふ。(蝦蟇記)



趣味談叢

雙魚堂主人談

○此頃暫く大坂へ行つて居つた。一本大坂には名物が無い、唯一つ古來誇となして居るのは義太夫だ。我輩は從來數々大坂へ行つたけれども、ついぞ女



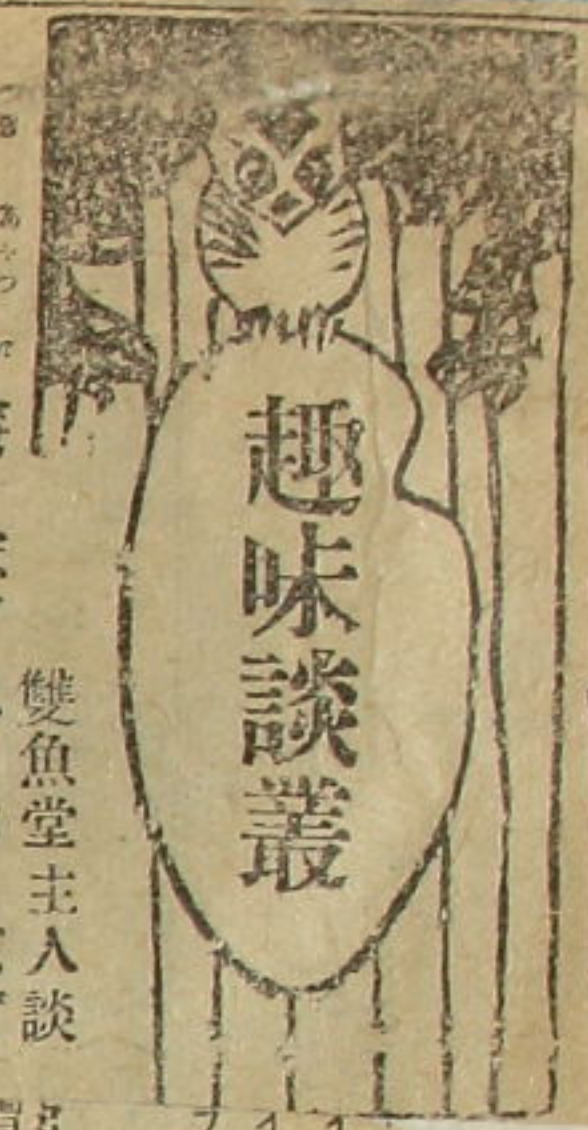
趣味談叢

雙魚堂主人談

樂座へは行かなんだが、今度行つた所謂大坂の義太夫を味ひ、且つ元祿の來の操り人形が残つて居るのを、聊か玩味するの機會を得たから、今日は其學を少しく語らうと思ふ。
○當日は攝津大塚と越路太夫が出語すると云ふので行つた譯だが、越路の方は曾て聞いたけれども、攝津は今回が初めてであるから、頗る興味を感じた。攝津の物語は「新編千本櫻」であつたが、彼が既に年齢八十を超えて居るので、之が最後だ杯と大坂では云つて居るが、其相貌を見ると僅に廿四五歳は若く見え、殊に品の良い濃眉は此人の特色だと云ふが、全く然りである。また同人の音聲は、世既に定評ありて今更云々する迄もないが、近來老境に入つてサビがついたと謂はるものゝ、聞かたる調子は壯者も及ばざるもので特に聲の長く續くと驚くべきで、一州聞半もふつ通して語つて聊かの涙みも倦氣味もなくやつて退け、人をして

恍惚酔はしむるの妙がある、流石に攝津は大家である。
○越路は人も知る如く攝津は高弟で、他日攝津になるべき人だ。此人のは往年聞いた時には解らなかつたが、今度「玉藻前」の段で之が何々氣に入つた。音聲は攝津の如き柄ではないけれども自然に備はる滋味に、他が眞似ること出来ぬ妙があつて、加之、如何にも語りに精神が籠つて、聽者をして自然に其境に在るの想あらしむる技倆には感じ入るの外はない。バツとして華やかな點が攝津の長所ならば、シットリとして餘情の深いのが越路の妙所で何れに優り劣りはあるまいが、我輩は特に越路の語り振が氣に入つた。其他當日は有名なるものが七八人列座して、總掛合をやつたが、全体に大坂の義太夫は東京邊の比てなく、如何にも氣韻が高々堂々たるものだ。

趣味談叢



雙魚堂主人談

○次に操り人形の大家紋十郎に感服したのは、流石に落付いたもので、素顔で静を遣つた折に、相手を勤めた文藏に至っては、氣合が表に顯はれて、其調子の付いた時杯には聲をあげるが單り紋十郎に至っては殆ど神色自若として居る處が偉い。

○元々義太夫は人形の操に和すべく出来たものだ。従つて義太夫は人形の操と照し見なければ音節の妙味や作の具合杯を解し得るものではない。例へば義太夫に於て、或感情の激した處杯を表現する時の音調には Kagasetton が多く、また其音節には、拮据の處もあつて、之を普通の人間の声色動作に

照せば如何にも不自然千萬ではあるけれども、之は情の欠けて居る人形に調和し人形の關節を運轉するに適合する様にしたもので、人形の動作と人間の動作と異なる譯であるから、不自然なのは己を得ない處である。同時に義太夫の特色もまた此にあると思ふ。

○それを是等の呼吸は義太夫語りでは解し得ない、操り人形を見義太夫を聞き、即ち視聽兩覺兼合せて始めて判斷が出来ると譯である。現に文樂に於て、名人が語り名人が操る處の有様を見る

と、如何にもヒシ／＼と調和して居る然るに普通の演劇舊劇に於ては人間が舞臺の上で義太夫と調和して活動しやうと云ふので、語り強て役者が人形を真似るのであるから、不自然に陥るのは當り前である。

日英博出品人形
子供風俗
東京浅草河崎時製

勿論文樂にも種々の變化があつて、現今の文樂は昔の文樂にあらず、例へば背景を改良して普通の劇場の如くしたと杯は元祿時代にはない變つて、甚しい變化ではあるけれども、人形は重なるに於ても、頗る興味あるものだ、但此者が前途何時迄保存され得るかと思ふとは自ら別問だ。思ふに今日の如き演劇の變遷甚しき時代に當ては、時には馬鹿らしい様な感じも起さやうから、或は永續がせぬかも知れない。併し斯る古風な型は何等かの方法で殘して置きたい様な氣もする。

趣味談叢



雙魚堂主人談

攝津や紋十郎の藝談は随分澤山あるが、此には一寸したと文話して置かう、

人も知る如くアノ有名な呂昇は、女てこそあれ今日は一廉の大家であるが、アノは元來素人の義太夫好で、また同時に大の攝津最負であつた爲め、遂に其の門に入り、今日の名を成した譯である、攝津常に門人に誨へて曰く、お前達は始終俺の傍に居るので、何時でも聽かれると思ふて、俺の精神の籠つた處を注意して居らぬが、其所へ行くと呂昇は感心だ、お前達は到底呂昇に及ばぬ、と云つたそうだが、操り人形に就ては紋十郎の實話があるから、一寸紹介して置かう。

人形遣も餘り樂なものぢやございませんよ。て惜か元祿の頃だらうと思ひますが初めて人形が出来た時は一人一役と決つてゐて義經なり又靜なりを一人宛で働かして居たのだそうですが假令木偶の坊にしても細い全身の動作を一人でつかひ分けると云ふのは到底出来る事では無いと云ふので孫四郎といつた人が分別をつけて首は首、手は手、足は足と恂う三通に分けて三人の人形遣で遣ふとにしました。が互に呼吸が解らないもの

ですから龜の子のやうに首が動かかと思ふと手は薩張動かなかつたり又花火線香の様に手は動いても足が棒のやうに突立つてゐたりして如何も旨く行きません其處で吉田千四といつた人形遣が頭に工風して考へたのが即ち當今私共のつかつてゐる遣方なので假に私が立を取つて真中に居

りますと右の手は立を兼ねて矢張り私がつかひ其れから左の手を一人、兩足を一人と恂う三人懸りて一個の人形を動かすことになつたのでございませぬ云々



新田田舎新聞

新田田舎新聞

現在五ヶ年...
現在五ヶ年...
現在五ヶ年...

買入...
買入...
買入...

新田田舎新聞...
新田田舎新聞...
新田田舎新聞...

長崎本...
長崎本...
長崎本...

九...
九...
九...

新田田舎新聞...
新田田舎新聞...
新田田舎新聞...

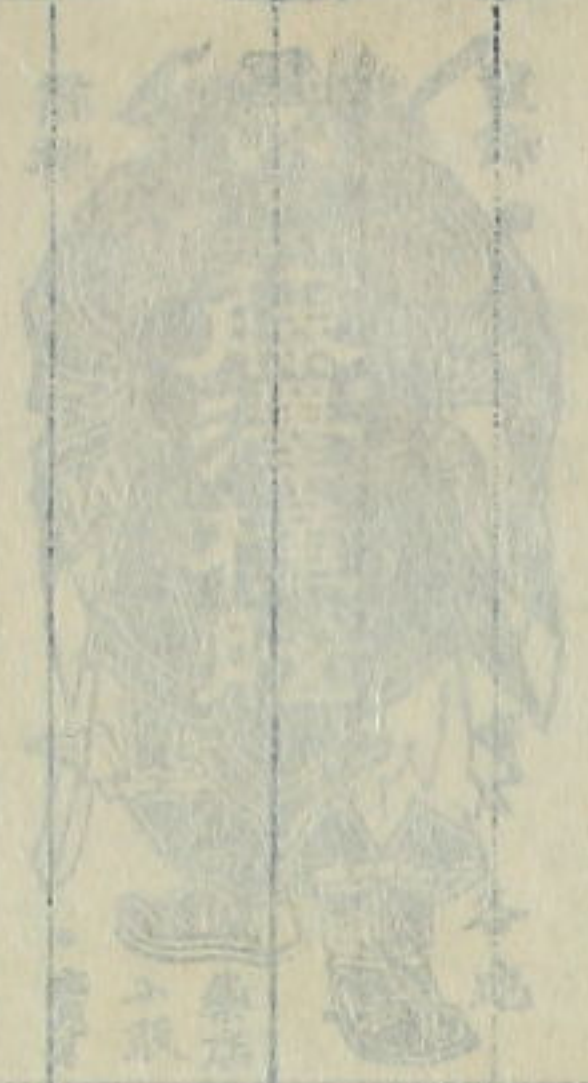
買入...
買入...
買入...

新田田舎新聞...
新田田舎新聞...
新田田舎新聞...

長崎本...
長崎本...
長崎本...

九...
九...
九...

御月心...
御月心...
御月心...



小豆...
小豆...
小豆...



味の素...
味の素...
味の素...



味の素...
味の素...
味の素...

廣告

入札拂下

第十三師團經理部

改定...
改定...
改定...

御...
御...
御...

平洋...
平洋...
平洋...

お雛道具



趣味談叢
雙魚堂主人談
けふは敦煌石室の書物の話をしよう
これは近頃隠れもない話したが、先年
佛國政府は支那の古書を探し此の敦
煌石室より大いに獲る所があつた。そ
れは仲々偉いものであつて唐時代の文
書などいくつも交つて居る。斷つて置
くが唐代の文書などは、支那でも極め

趣味談叢

雙魚堂主人談

又前に言ふた經文の版にしても實に大発見である。支那には書物の上にこそ、宋以前唐あたりには既に版本のあつたのが載つて居るが、實物は一つも残つて居らないから、例の支那人の法螺だらうと云はれて居たところ、今度は愈々實物に依て證明された、先頃日本へ來た羅振玉と云ふ人が、此の發掘物の重なるものを寫真にとり、日本にも其人の手から一二通渡つて來て居る。それを此頃見たが、成程版は確かにある、僅か三十行計りの陀羅尼經を刻したものであるから短篇には相違ないが、其の書風の肉太に書いてある所、其他の點も日本の春日版によく似たものである。

○切て佛人が斯る発見をしたので支那

逸人の見て居るのは、時代の下つた法帖などに其面影をいくらか窺ふて居るに過ぎぬ。然るに今度は其正体を見ることが出来るのである。唐太宗の書も同様で、其頃の刻本に就て見てこそ初めて眞面目が窺はるゝのである。現に此帳が出た爲め一種の疑問が生じた。今迄は義之の蘭亭記の尤もよろしいのは、定武本に相場が極まつて居り、支那人の之れを尊むとは實に非常のものであるが、義之を崇拜する餘り其の法帖を前後棺中に納めた、太宗の書は必ず義之の筆法を傳へて居るに相違ないが、さて今度出た唐刻の太宗の書に就て見ると、神龍本の方が餘程太宗の書に似て居り、隨て定武本よりも神龍本の方が、眞の義之の面影を留て居るらしいと云ふ論も出て來た始末である。序に云ふて置くが、神龍本は唐代は傳はつた義之の雙鈞本を本として刻したものであつて、唐代の有識者は多く雙鈞本を貴むた者だ。定武本は名高きはあるが、根據の曖昧なもので實は疑問である。

稀れなもので、日本で天平時代の遺物を珍とするよりも一層珍とする程稀なものである。其發見された多くの書類を一々舉る譯にもいかないが、一つ二つ舉げて見れば、支那では版本は宋版が一番古いものとして残つて居るもので、其以前のものとしては支那廣しと雖も誰も有して居るものは無い。然るに今度は經文ではあるが、唐末の陀羅尼の版本があらはれ出た。又五代の版經もあらはれた。唐代に刻した唐太宗の法帖やら柳公權の肉筆帖などもあらはれ出た。其他學術の參考になるべき文書は數知れず發見されたので、學術界に稀有の材料を與へた。また研究中に屬して居るが、いよく研究済になつたらば歴史學其代の支那の暗黒面に非常な光明を與ふるとであらう。

●單に前に挙げた一二に就て云ふも、學者の研究に大なる利益を與ふるものである。例へば柳公權の字にしても今

面白き結果もあらはれるであらう。何にしても斯る発見の續々起るのも、畢竟は文明の賜である。交通ありし支那大陸には識者の手の届かぬも道理にて、これよりますますこんな発見があるに相違ない、實に學術の爲めに祝すべきことである。(癡峰記)



趣味談叢

雙魚堂主人談

我々が大學へ入つた時は明治十年の西南事件の前であつた。其時分の大學は學科は分かれて居たとは云ふ條、其學科に従事した學生は、今日の如く各専門學を固執したと云ふ様なものではなく、非常に交りのもので、理科法科のものが文藝のものをやつたりして、今日稱顯然たるものではなかつた。従つて同時代の人々には、隠し藝に富むた者が多い。否寧ろ隠し藝の方が其人

である。發見した法主はまだどんなものか夢中で居るに相違ないが、友人は此の寫しを得て、數日間晝夜の別なく考證につとめたところ、勉強の甲斐あつて、晋書の内李柏の名も鄆單王の名も共に同一頁中に發見したと云ふて我輩に非常に誇つた。成程晋書にハツキリ載つて居る人の肉筆が發見されたとするれば、實に稀世の珍と云はざるを得ない。李柏と云ふ人は王羲之に略々同時代の人である。義之の正筆はすべて亡びて唯た臨摹法帖などによりて覺束なくも其面影を揣摩する今日、其時代の人の書を得たとすれば、其實物を見れば義之時代の書の風も分るであらうし、又友人は此の發見文書は楷書に書いてあると云ふて居つたが、果して然りとすれば、義之若くは其頃の楷書の体も初めて分明なるとが出来るであらう。また晋代に於て手紙は木に書いた例もわかり、いろ／＼研究せばな

人が悔しがり、またいくらか残つて居るも知れぬと云ふので、其邊を搜つて見たところが、搜索其甲斐あつて、更に六千點を獲たと云ふとである。二回日のものにはドンなものか、まだ一向分らないが、何にしても時代が唐若くはそれ以前であるから、どんなものにしても非常な參考になるものに相違ない。或は震天動地の大発見がないにも限らない。今度の發見の文書を試みに寫真に取れば、一部の費用が三千幾圓かまると云ふ位なものだ。兎に角祝すべきとして、學者はいよく多忙を加ふる譯である。

○序に云ふが先頃西本願寺法主が支那の西域を探險中某所に於て古鏡や古器や古文書を獲た、その古文書一二通の寫しが隨後の人より友人の手元に達した。此頃我輩もそれを見たが、それは李柏と云ふ人の書簡で、一通は紙に認めてあり、一通は木片に書いてあると云ふ事だ、二通共鄆單王に呈した手紙

の天才で、それが却て偉いと思はるゝ人が多かつた。今突然の事だから詳しい話は出来ぬが、一つ二つ同人の事に就て吐きそうか。

◎先嘉納治五郎君だ。嘉納君は柔道の大家先生で、柔道に於ける近世の大家殊に依れば空前の大家だと謂はれて居る。斯うなつたは無論一朝一夕の故にあらず、全く在學中に學び始めたものである。矮身肥大の大男が、大きな徑二尺五寸もある笠を阿彌陀に冠り、小倉の袴を穿き肩を聳からして學校の門を出入したのが嘉納君の當時の有様で、同時にそれが柔道研究の時代であつた。柔道は本来君の隠し藝であらうが、斯うなれば本藝と云つても差支はあるまい。

◎次が坪内逍遙君だ。逍遙君が文學界の泰斗たるは云ふ迄もなく、元來が器用で多能多才であるから筆の事に掛くは何一つ出来ぬと云ふとはない。併

し其隠し藝は鳥羽繪にある。同君の學窓時代に於ける鳥羽繪は仲々達者なもので、時には精細なる人物畫等も作つたので、同人は其意中の美人を描いて貰ひ、之に彩色を施し愛蔵したものもあつた。現今在れば珍とすべきものであるが殘つて居らない。併し鳥羽繪の方が長して居つた。今日は避けて居るが、恐く斯道に於ても一家を占め得られたらうと思ふ。

◎それから三宅雪嶺君だ。雪嶺君に畫趣味のあるとは近來の「日本及日本人」に掲載して居る書論に於ても推測するところが出来るが、事實其隠し藝も確に畫にある。同君は、在學中は非常の天性者で、何ヶ月経つても髪を梳ぐ杯も云ふとはなく、衣服も垢染たものを着け、寒中にも足袋を穿かず、手も垢で真黒であつた。然るに一本の鉛筆を手にして――無論此鉛筆は汚いもの――一度之を動かさし西洋畫を描けば、

才に富み、特に狂詩に於ては縦横自在の妙を得て居る。近年我々の舊同窓が一橋同窓會を催した時に、普通の案内状では興がないと云ふ處から、同窓時代の事を序した狂詩の長篇を作りて案内状にしたとある。其時立ちに和韻の返事を遣したのが此の目下部で、それが如何にも縦横なるものであつた爲め、原作者大に恥入たところがある。◎磯野徳三郎君。之は芳菲山人の號で長く日本新聞紙上を賑はしたこともある。君も理學者であるが、其道の學者としては何事をもせず、文藝にて世に知られ、小説も作れば詩も歌も出来た人だ、不幸にして蚤世であつたが、寧ろ隠し藝の方が本藝である。それから故三崎龜之助君だ。之は一時政友會の記者と謔はれ後には正金銀行の頭取にもなり、全くの法律家である。同君は學窓時代に於ては無趣味で、勉強家と云ふ他には格別知る處なかつたが、馬ぞ知らむ後に至り大の仁清通を以

て聞え、且つ自身も數十點の傑作を藏するのとならんとは、學窓後の研究家には相違ないが、確に隠し藝である。◎岡倉學藏君。美術の上に於ての同君は誰も知らぬものはないが、由來文學の出身であつて、美術の方に隠し藝が本藝となつたので、此外には詩才で、無論天才であるから、之を専らにせば詩壇にも立つとの出来る人だ。兎も角今では詩が隠し藝である。次で今日の政友會に時めいて居る元田肇君。大學で日本古代法の大家たる宮崎道三郎君等も、法利に學んだものだが、元田は石窓、宮崎は津城と號し、共に學窓時代の詩人であつた。◎文科大學長の坪井九馬三君は學才の秀逸なる人で、史學者として知られて居るが、之がまた理學者でもあるとは知らぬ者が多い。同君は非常の勉強家で、史學を専攻した後更に理學を研究したものである。それから理科大學の田中館愛橘君と藤澤利喜太郎君は、有

誰も舌を巻く程の大技師であつた。君も斯道に於ても大家たると得べき人である。

◎前の内閣書記官長の石渡敏一君は法律家であるが、同君も仲々多趣味で、殊に陶器の研究は近々非常に上達したやうである。君は陶器に於ては骨に鑑賞力を有するのみならず、夫子自ら奮つて焼くとさへ試みた。不幸にしてそれは皆く行かなかつた様ではあるが、兎も角一種の隠し藝であらう。

◎内務省の有力なる技師目下部辨二郎君は理學者である。同君は故巖谷一六翁の兄、磯山人の兄で、鳴鶴翁の養子となつたのであるが、理學者だから文才はあるまい杯と見括つては大間違で、親父の天才を受継いだ爲め仲々文



趣味談叢

鯉魚堂主人談

數の理學者であつて、兩人共文藝の趣味に富み仲々の文章家である。◎早稻田大學長の高田早苗君が法學博士で、政治、憲法、歴史の諸學に詳しく。また教育事業の經營に就ても非凡であるとは世に知られて居る。それで同君の隠し藝はと謂はば人或は諺曲だと謂はんが、或る程諺曲も隠し藝だけれども眞の隠し藝は劇通並に小説通で、之は坪内君等より先輩と云つて宜しい。君の家は代々江戸に居たので、從て君は劇に於て先天的の通人だ。小説に至つては日本でまだ西洋小説の鑑賞をせぬ時分、大學在學中既に研究したもので、之も餘程の通人だ。早くから始めたと云ふ點に於ては確に坪内君の先輩である。マア是位にして置かう。(鯉魚記)



趣味談叢

鯉魚堂主人談

◎近來謠曲の流行は著しいもので、我輩の同人の如きも何十人となく、殆ど皆斯道を研究して居る位、續ては能も仲々盛のものである。此時に當て謠曲や能の歴史を研究すると云ふとは、開却すべからざる事だと思ふ。

◎謠曲に於ては其昔觀世音の三字を取入れた觀阿彌、世阿彌、音阿彌が斯道の祖とも云ふべきで、之は誰も知る處である。其中觀阿彌の經歷は分らぬが、四十位で蚤世した様である。其次が世阿彌で、此人が能の老熟した時、其孫に當る元能と云ふ者に筆記せしめた藝道の奥儀が遺つて居る。其書は黒川春村の家傳つて居たのを、先達て物故なつた小杉榎軒氏が猿樂の事を調べるには大切なものと云ふので寫して置いた譯である。併し小杉氏は只之を藏して居たのみであつた。

六枚足らない。處が安田善之助氏が偶然にも達磨屋五一の舊藏本の古寫本を求めた中に、前の欠けた處の揃ふたものが發見されたので、茲に完結するに至つた。

つて、兄弟の順位も明瞭となり、續ては生一の家は細々ながらも現に大阪に殘つて居ると迄分つた。また此書に依りて謠曲の重なるものは、多く先代の觀阿彌、世阿彌の作であつたとも分る。即ち實盛、浦盛、放生齋、松風、村雨の如きは世阿彌の作、小町、自然居士四位少將(通小町)は其先代の觀阿彌の作又百萬、山姥は世阿彌の作で、佐野の舟橋も從來いづらか在たものを世阿彌が改作したる杯が明瞭となつた。

書いてあるから、謠曲能界に於ては眞に寶典とすべきものである。◎また此書に依りて間接に當時の世相も窺はれ、はた正史に顯はれざる史料をも發見される。例へば此に斯う云ふとか書いてある。鹿苑院の御恩人、高橋殿東洞院の傾城也、これ萬事の色知にて殊に御意よく、遂にちち目なくて果給し也、上の御機嫌をまもらへ、酒だも強申すべき時は強、扣べき所にては扣など様々に心遣して立身せられし人也かやらの事は世上に沙汰することを記す、世子かやらの所殊に名人なりとして品々褒美あり。

◎ある友人から老樹名鑑と云ふ新版の番付を贈られた。それを見ると今存して居る東京の名高い老樹が凡そ千二百三百も載つて居つて、其長さや幹の徑や持主や木の種類等が委しく註されて居る。老樹擁護鼓吹の目的を有する好事家が作つたものと見ゆる。先づ東の横綱には



雙魚堂主人談

◎それから有名なる能の『花傳書』之は世阿彌の作として斯界に珍重されてあつたが、今世間に流布して居るものは偽書で眞のものは全く異つて居る。即ち安田氏の手に入れた中に原本があつて、それにて眞偽も分り、其他藝道に關する事柄が皆此十六部集に詳しく

像せらるべく、彼の思人が甘くやつか調子を學んだ處、即ち君寵を固くする

善福寺大銀杏 幹廻り三丈 高五丈餘七百年以上 麻布山元町善福寺



雙魚堂主人談

とあつて西の横綱には
光開寺大銀杏 幹廻り二丈八尺、高八丈千年以上、小石川區久堅町光開寺

大關には
凌雲橋 高五丈凡七百年、上野公園、風坂凌雲橋の北方角

東照宮大楠 幹廻り二丈五寸、高八丈、上野公園、東照宮の左にあり

吾嬭大森楠 吾嬭吾嬭神社、日本武曾妃を祀る、境内に二千年を經、云ふ高五丈、日本橋區、榎野、元松平三河守邸也

杉村家大楠 榎町川岸杉村家別荘、元松平三河守邸也

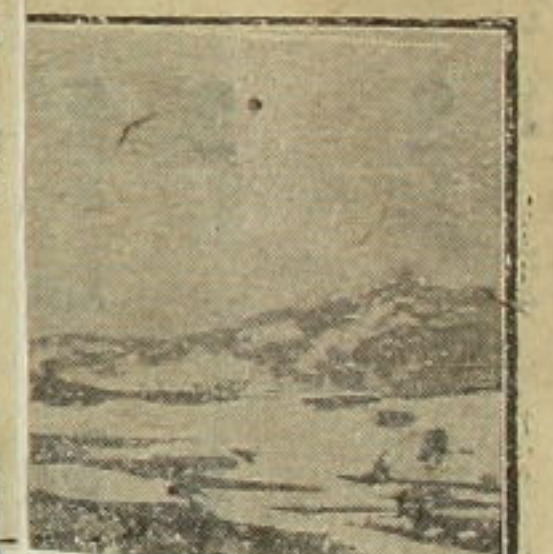
こんな具合に並べてある大番付だ、老樹研究は、一種趣味ある研究で、墓しらべ杯に比して一段目新しく覺へる。且つ其擁護の鼓吹はまことに必要で、我輩も同感である。

◎日本では鳥獸等には獵期が八かまし定まつて保護法がある、魚などにも保護法がある、樹も森林などにはあるが、森林以外のものには未だ保護法が無い。例へば高山植物などは學術研究

の上から云ふと大切なものであるが、一体寒い場所に産するものであるから、決して多く産するものではない、それを矢鱈に採り盡くせば終に根絶やしをする憂もある。何れにしても保護は、法律の上に於ても習慣の上に於ても、或もの以外其だ不完全で、ドテラかと云ふと稱いものを保護する氣は付て居るが老物の保護は氣が附かないと云ふ有様だ。然かも此老物を最も大切である、何百年経つた樹などは、再び出来るものでない

これこそなか／＼等閑に附すべきもので無い。

◎ナゼ老樹擁護の必要があるかと云ふ、一口に云へば風致の爲である。風致の爲め杯と云ふと、實利論者は風致などの爲めならどうでもよいじやないかと云ふかも知らぬが、それならば風致林保護も要らぬ事になる、風致は甚



る、樹若し靈あらば何百年何千年を語るであらう、眞に無文の歴史とは此の樹である。

◎且夫此の老樹に對すると何となく神秘的の崇高の感に打たれる。これは決して迷信でない、太古を知るものは此樹より外に無い等だから斯る感に打たれるのである。而して此の感想は風致の上に大なる關係を有つものである。恰かも神佛を崇拜すると同様に大切な關係がある、村の風儀などにも此等の物の有無は餘蘄關係のあるものだ、それをムザ／＼截るなどは實に譯の分らぬとであるが、元樹はなか／＼手を掛なければ保たぬ物であるから、村などの充分保護を要する、村のみに限らない、都會などは樹が少ないから尙更の事である、風致に必要なとは言ふ迄もなからう。貧乏屋などに兎もすと實に貴とむべき老大樹のある處などがある。それは實に其家の寶であつて、其場所を九鼎大呂よりも重からし

だ大切である。そのみならず、風致以外に風致上にも極めて大切である。請ふ少しく語らんか。



趣味談叢 榎魚堂主人談

村落などに居るものは誰も承知の事であるが、少年時代の遊び場は概ね村の社の境内で、渠等の俱樂部は此の境内である。而して此境内で尤も名染のものは何だ云へば、此處にある老木である。渠等は家にあつて母からは此の樹に就いていろ／＼神秘的の昔し話を聞き、或は其發生の歴史を聞き、前の祖父さんの頃には、あの枝が無かつたとか、あの頃は、周囲がまだ何開位しか無かつたとか、嘗て樵夫が密かに伐りにかよつたら、上から落ちて斧で怪我をしたとか、いろ／＼の話を聞かされる。また子供も遊びに行くと、

大勢手を擴げて測量をして見たり、木のウロの中に入つて隠れん坊をしたりと遠くから歸へるときに先づ此の大木を望んで家の近きを知るなど誰しも名染であるが、樹も又子供をよく知つて居る。口にこそ云はざれ、御同前の青年時代をよく知つて居る。あれは腕白ものであるとか、あれは愚太郎といつても朋輩を泣かせる奴だなど云ふ様子をよく知つて居る。

◎否我々の事ばかりではない、我々の親のとも祖父のことも曾祖父の事も何百年若くは何千年前、我々の先祖の事もよく知つて居る。人間は幾度も變遷し、人家も幾回か變はり、土地もいく度か變遷しても、此の樹は神聖なる境内にある丈に變はることなく、常に變遷を傍觀して居る。村の記録はいく散逸しても此の樹だけは唯一の記録として存じて居る。村中にいくら年の老た人が居つても此の樹には及ばぬ、村中にて尤も古るものは此の樹であ

る、樹若し靈あらば何百年何千年を語るであらう、眞に無文の歴史とは此の樹である。

◎先日攝津大塚、紋十郎の事を話したが、また一ツ二ツ補遺として話して見よう。一体攝津の聲は「サビ」を缺いて居る、此點に於て人或は淨瑠璃に適應ぬと云ふものもある。同時に攝津自身も自己の病を知つて居る、知つて居るから自家天品の美聲を利用し、他人の企及し能はざる一種の節を工風し出した、それが如何にも巧妙に確かに人を魅するの魔力がある。攝津が淨瑠璃界に横行漸歩して何人も之れと争ふとの出来ぬのは、此の一種の特色が少なくとも四分通り手傳つて居ると云ふも誣言であるまい。

ひる事のあるのは、樹一本が非常の風致を添ふるからである。(趣味記)



趣味談叢 榎魚堂主人談

某醫學博士は攝津の語るを聞き、如

何にも其聲の曇りの無いと其聲のよく
續くに驚き、嘗つて攝津に納得させて
咽喉と肺臓の検診を試みたところある。
検診の結果は如何にも不思議！。彼れ
の咽喉の氣筒に備はつて居る瓣は、全
く婦人のものと同じであるを發見し
た、それと同時に彼れの肺臓は非常の
健全であるとも發見したと云ふとて
ある。成る程彼れの聲の美は、全く女
性に見るの美であつて、男子の美聲と
は趣を異にする所がある。加ふるに百
鍊の功を積んで自在に聲を弄するの
あるから、聴衆を恍惚たらしむるも無
理は無い。

○談醫學の事に涉つたから、攝津の事
てはないが今一つ淨瑠璃に就き、醫學
の研究の結果を語りよ。河本博士の門
人て、眼科専門の新津二郎と云ふ醫學
士が、此頃大坂に開會した醫學大會に
演説した。其説に據ると誰も知つて居
る淨瑠璃の壺坂の澤市……これは淨瑠

璃では、谷間に墜落して目があいたの
は觀音の利益だと云ふ事になつて居る
が、此の新津學士の説に據つて見ると
觀音の利益でなく、俗に云ふこひ、
即ち醫學上では白肉障と云ふ學名の付
て居る眼症は、外部から非常の震動を
受けた事は、白肉障が脱出して本眼す
るところのあるものだ云ふ事を、事實上
から説明したのである。

○新津氏の擧げた實例が二つある。一
は千八百十三年に獨逸に出版されたハ
ール氏のゲースアツグと云ふ書物に、
佛國のヤニシ氏の實驗談が載つて居る
その事實は先天的に失明者であつた十
四歳の小兒が、或時樹から墜落して強
く頭を打つた結果、白肉障を脱出した
とある。

○又其一是新津學士自身の經驗談だ。
長野縣小縣郡依田村の上野朝重と云ふ
本年六十二歳の老人は、五十歳の時そ
こひに罹つて十二年間失明して居たが

同村の龍尾山龍泉寺の藥師如來に熱心
日參祈願して眼病の平癒を齎つて居る
内、圖らずも藥師堂の柱に頭をひどく
打ちつけ一時人事不省の状態に陥り、
夢心地になつて居る所へ、五六十頭の
馬が駈け來り中に氣高い天女の馬上に
あるを認むると共に、漸やく我れに臨
ると、兩眼より涙流れ出て、爾來少し
く太陽の光線か知れる様になつたので
是れ全く藥師如來の御助けと喜び勇む
て新津學士の許へ治療を求めに來た。

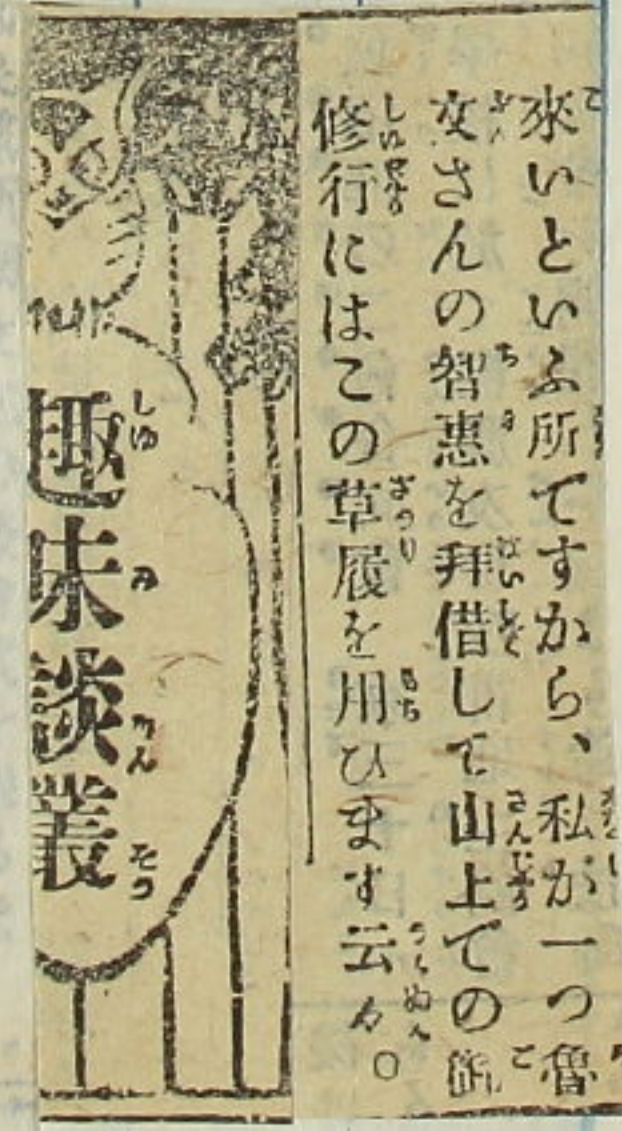


趣味談叢

新津醫學士は之を檢するに、全く純
然たる白肉障で、患部が硝子体へ稍々
すべり落ち一部の部分には水氣の
あるを認めた。そこで新津氏は局部を
切開し垂れた白肉障を取除いた後は追
々回復し今は全く十分の視力を具する

に至つた。個様な東西の實例に徴する
と、こひは外部の震動により脱出の
出來るものであるとが初めて証據され
れた。同時に壺坂の澤市の目の開たの
も、つまりは谷間より落ちた震動から
白肉障の脱出した爲めであらう、當時
果してこの事實があつた爲めに不思議
と云ふので、佛法利生の材料に遺つた
のではあるまいかと、新津學士は大坂
へ來た序に壺坂山の南法華寺にも參詣
し、作者の團平の女房などにも問ひ試
みたそうだが、終に要領を得なかつた
が、兎に角趣味のある話ではないか。
○紋十郎は今文學で悉多太子と御者の
車匿と訣別の處を勤めて居る。檀香山
の苦行の處に紋十郎は太子に草履をは
かせる趣向であつたのが、何故か見合
せた様で、自分の觀た時には太子は跳
足であつたが、此の草履につき座の開
く前に紋十郎が人に語つた竟匠談か面
白く且つ趣があつて、名人の苦心はな
か／＼妙な處にあるものと云ふ事がわ
かるから、紋十郎の語つた話を其儘

左に掲出する。
もう餘程前にとですが、私が東京へ
參りました時に新富町の假名垣魯文
さんの請へ行きましたが、何しろ御
居間の襖に法華經の普門品を貼り交
にして喜んでゐようといふ程の御方
ですから、御道具などにも随分變つ
たものが多いので御座います。魯文
さんは庭前にあつた蓮の草履を指し
て、儂がなぜこの草履を穿いてゐる
か聊これを知つてゐるかといふお尋
ねでしたけれども、素より私は心得
ません事ですから有体に申上げます
と、是れはお釋迦様が御修行中に跳
足で歩いたらしい小さな蟲の道場を失つ
て踏殺されやうも知れぬ、切めて蓮
の様なぶく／＼した草履でも穿いた
ら眼に見えぬ蟲を踏み殺すやうなと
もあるまいと凭ういふお考てお穿き
なされたのがこの蓮の草履だ、何か
の役に立つ事があるかも知れないか
ら咄して置くのだと親切に教へて下
さいましたが、今回の出物には持て



趣味談叢

來いといふ所ですから、私が一つ魯
文さんの智慧を拜借して山上での御
修行にはこの草履を用ひます云々。

●賣田會社相談役

賣田會社相談役の件... 大塚新太郎、長部三郎、渡谷修、内田三...

●新田の池長専務互選

新田の池長専務互選の件... 池長専務の互選を期して...

●本郷新支部の総會

本郷新支部の総會の件... 本郷新支部にては来る廿二...

●縣染織聯合總會

縣染織聯合總會の件... 本支部者共同案...

●會報發刊の件

會報發刊の件... 本會規約第二條及第五條へ左の但...

●第二期編纂準備

第二期編纂準備の件... 第二期編纂準備の件...

●本郷新支部の総會

本郷新支部の総會の件... 本郷新支部にては来る廿二...

●縣染織聯合總會

縣染織聯合總會の件... 本支部者共同案...



趣味談叢

◎文人の印と雅號 (二)

○篆刻の事に就ては我輩も多少の趣味を有つて居るから、何日か専門的に話すが今日は文人の印と雅號の話を二つ三つ話して見やう。支那は古來非常に印を重んずる國で官吏更迭の場合など其官印の授受を以て証據とする程貴はれて居る。之に就て一つ面白い話がある。曾て日清協和條約取換はせの際我輩の友人も伊藤、陸奥兩全權について諸般の談に參したとがあつたが、扱て愈々兩國全權が自署調印と云ふ時にならざる、何分向ふは支那人の事だから仲々業々しい見暮で、紫檀やなにかの二重函の大きなものを多勢の役人が捧げて李鴻章の前へ持て來た。處が伊藤、

陸奥兩氏の官印は日本流で柘植かなにかの小さいものと來て居るから大に立會負けをする場合となつた。そこで流石の陸奥氏も大に弱つて次の押所へ來て我輩の友人等に、コンな袋へも入れぬ小さなものでは出されぬか突嗟の間、に重々しくすることは出来ぬかと詰問されたが、何分にも突嗟のとてあり如何とも致し難く僅に大奉書に嚴しく包んで持出し、お茶を濁したと云ふ話である。印は全く斯なものだ。

○細川林谷は有名な幾筆家で書畫もよく印は一種の風韻を有し、其上非常に達者なもので、立るに一刻を成す程であつた。曾て越中の去る寺に寓居の際住職が學問があつて特に詩は自慢だと云ふ處から、林谷に對してお前は印が達者だと云ふ事だが一詩一作の賂を遣うじやないかと云ふ譯で、僧一詩成れば林谷また一刻をなし、遂に一刻にして數十詩數十賂をなしたと云ふとてある。又曾て頼三樹と林谷と同席した



趣味談叢

○元來印と云ふものは決して篆刻家が營業者としてあつたものではない。つまり字を能くする人は誰も刻したもので、即ち毫筆に代ふるに鐵筆を以てした譯だから、古來の文人は誰もやつたものである。如此文人は凡て篆刻をやつたものだから中には有名なる人もあつて、大雅堂等に至ては専門家が敬服する程の技柄で、我輩所藏の『萬物一

焉』の如きは篆刻家の激賞するものにて、大雅の中の名なる一と云はれてあるが、如何にも旨いもので、古來日本に於て之に匹敵する程のものはいと迄謂はれて居る。篆刻は氣韻が直に移るものであるから大家の作で氣韻高きものある決して偶然にあらずだ。○頼春水も自刻て作をなし、自分の用ひた大部分は殆ど自刻の印である。山陽が數々用ひたものある『蕙々』の如きも春水の刻である。春水の没せんとするや、自刻の印を悉く破棄せんとし門生に遺命したが、門生は遺命とは云ふものゝ誠に惜むべきことであるから僅に一刀を加へて置いたものが傳はつて居るので、廣嶋邊では今も續々それを捺して貰ふものがある。

◎文人の印と雅號 (三)

○日本に於て印聖と稱せられ、一人の異議者のないのは高芙蓉(大島逸記)であるが、此人の逸事を翻らず京都に於

て發見した。鳩居堂へ行つた處が山陽の草稿を貼付した額がある。之は『蘇氏印略』の跋文で誠に珍らしく思ふた。『蘇氏印略』は嘗て出版されては居るが、山陽が其爲めに書いた跋文は載つてないのに、茲に其草稿を見たので、少からぬ感興を催ふした上に其跋文中の逸事があるから猶更面白い。事實は山陽が柴栗山に開た話である。芙蓉は一代の名家で、如何に苦心の作も苟も其意に満たざるものあれば世に出さず、毎日刻しても面白くないと直に庭前へ投して顧みない。すると高の妻君が之を見て惜しい譯だと云ふので夫の不在の時に鈴かに之を拾ふて磨いて良く洗ひ清めて机上に置くと、先生歸つて來て之を眺めてナゼ斯うしたと言はず又之を捨てる、妻君が又拾ふて之を机上に置く、斯くして同一事を繰り返したと云ふとてある。之は實に傳に足る話であると思ふ。



趣味談叢

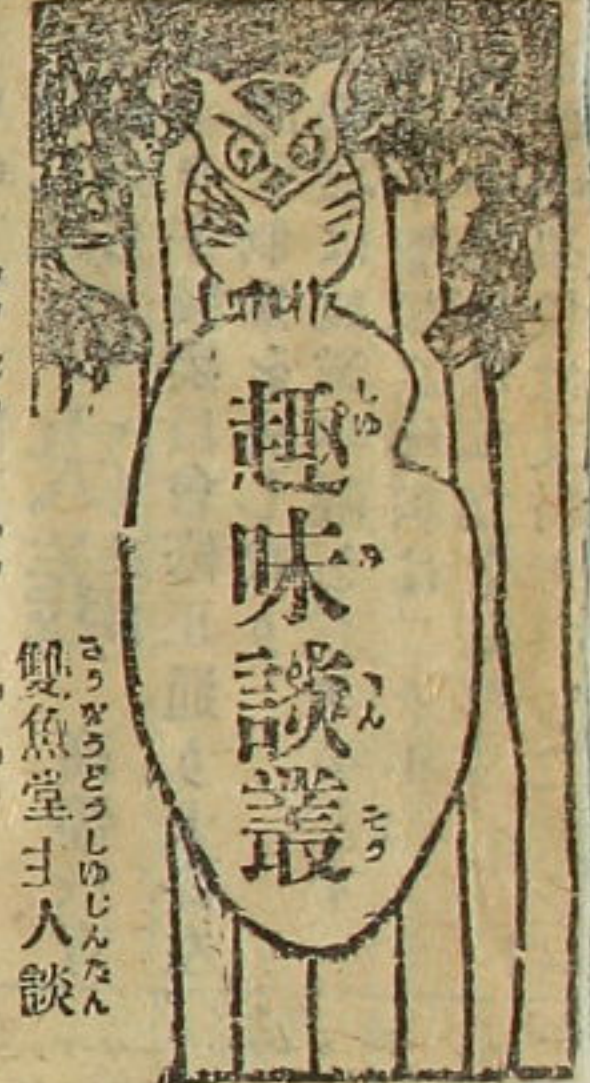
◎文人の印と雅號 (四)
○名家の印の今猶遺つて居るものもある。徂徠の印は現に口谷に其子孫があつて、其處に残つて居る。我が輩も兩三年前捺して持つて居る。また竹田の印は田能村梅士と云ふ人が藏して居る。梅士は、法律家ではあるが、直入の息竹田の孫であるから藏して居る譯だ。凭う云ふ話は何もあるけれど是位にして置くが、茲に一つの話がある。



社會紀念



○それは例の山田寒山が翁槐南の爲に印を刻したとて、是は仲々面白い。寒山の刻したものは「青山南麓、百二精舎」と云ふ字で、之は何ういふとかと玩味して見ると、槐南が青山南町六丁目に住まつて居るので、青山南麓と選み六を麓と通せしめ、それから百二精舎は、槐南の家が百廿番地だと云ふから出たので、精舎は多く山の麓などにあるのを持つて来て、青山南麓に照應せしめた處は實に面白い。之は寒山の工夫に出たものである。

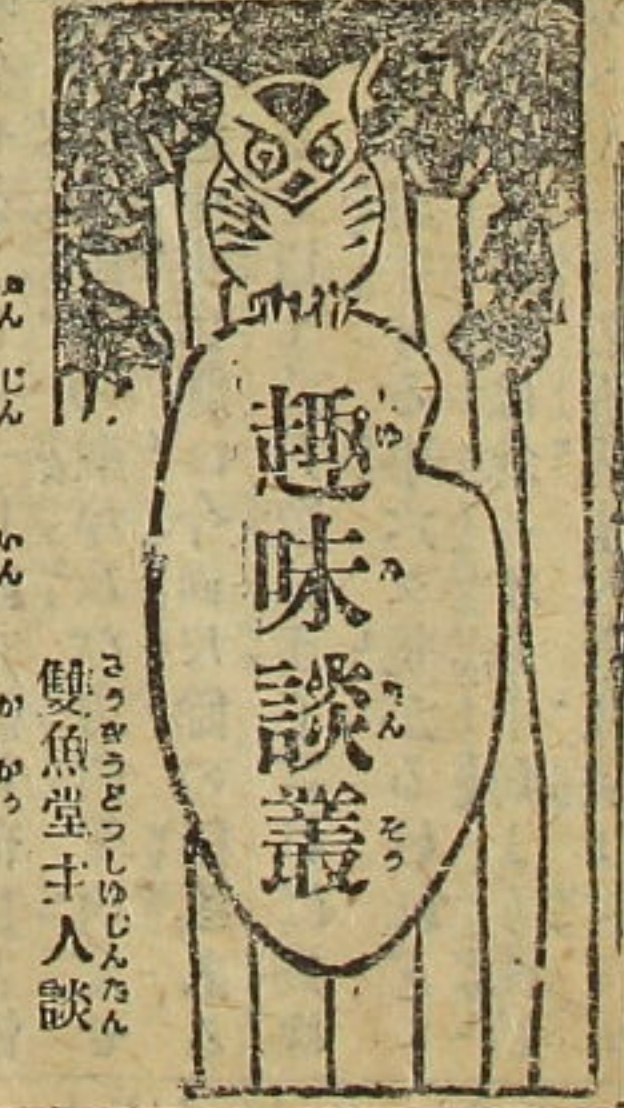


◎文人の印と雅號 (五)

○我輩の友人坂口五峰が、自分も一つ其類に倣ふと云ふので、坂口の姓から「茶香雨風書屋」仁一郎の名から「二一老人」と考へて、我輩に示し且つ、雨賦の二字は半熟で面白くないが、何とか工夫はあるまいかと云ふ。そこで我輩は、イヤそれと澤山面白い、くが雨でも差支ない、先頃没した長谷川四迷は文名多く二葉亭四迷として知られて居るが、アレは渠の親父が曾て「くたばつてしめい」と云つたと云ふ處から出たもので、例へば二一四迷ならざる文字あるも、語呂圓熟し字面雅麗ならんには用ひて雅號とするに差支ないか

ら、君のも雨を強くとするにも及ぶまい、餘り常籍り過ぎるも却て妙を失せずやと一笑した。

○五峰更に曰く、誤て議員となりし爲め勳四等を賜はつたが、元來詩人には要らぬ、併し折角のものを没するも遺憾だから種々工夫して「薰芝洞」とやつて見たが、芝に薫りあるや否やも疑問であるし面白くないとの話。そこで我輩が、君なんぞは寧ろ「華世堂」が良いじゃないかと云ふと、五峰は流石に漢學者丈に、華はくんにあらずと辯駁したので我輩も大に退屈した。



◎文人の印と雅號 (六)

○何うも此儘の名を雅にするると云ふと

に就ては漢學者殊に詩人が妙を得て居る、詩人は文字を弄するのが本職だから左もあるべきとてある。例へば大阪には「花外樓」と云ふのがあるが之は「加賀屋」と云ひしを木戸公が命名したもので、また京都鴨川の辭にある「牛庄」を或文人は「依溪莊」と命じた。東京では向嶋を「夢香洲」と云ふとは誰知らぬものはないが、特に面白いのはアの百花園の附近にある「入金」と云ふ鳥屋だ、入金は煎り鳥が名物で家の内儀が金と云ふ處から初まつた譯で、鳥屋とは云ふもの一種の待合である。併し入金では俗だから何とか命名しやうと云ふので文人連中が寄つてたかつて考へたが、可然名がないので四つて居る中に、九年物故つた大久保湘南が「透鏡錦」の雅名を附した。即ち金屏の透鏡たる裡に深く鸞鷲を藏する態をも偲はれて輝る雅なものとなつた。

○名を附するとに於て天下第一と稱すべきは故巖谷一六居士であらう、夫子

自身の別號が既に面白い。一六は別に「香澤山人」「吸霞」等とも稱す。之は一六は、月六齋は休日だと云ふ處からどんたく(和蘭語の休暇)とか、吸霞(休暇)とか云つたものである。次で居士の「古梅」の號は、梅はまた「ま」と音み駒井小路に住んだからであらう。如此居士の命名は天才とも云ふべきもので、しかも突嗟の間に出るのみならず皆相應に寓意があると思ふ。何日か我輩同人四五と濱町の岡田へ寄つた時に、一六書の「冠城東樓」の扁額があつて、之にも何か寓意がありそうなのだと話した、我輩之を解釋して多分「勘定取らう」と云ふのであらうと云つて笑つたがある。



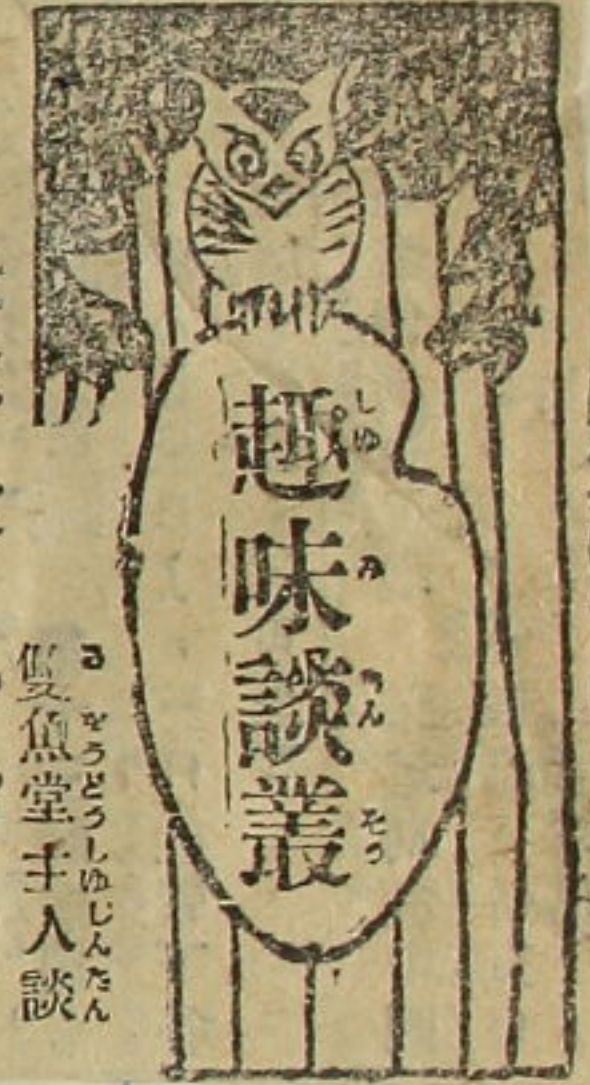
◎文人の印と雅號 (七)

○新潟の銅茶屋を「雨邊茶屋」或は「那邊茶屋」とも名けたとは越後人は誰も知て居るが、同じ新潟での名前でも行形亭は六ヶ敷しく僅に「游幾也亭」に止めてある。また古田の「風流萬千」と藤井の宅には翁の「風流萬千」の額が懸かつて居る等だ。

○春濤と云へば翁に就て面白い話がある。翁の新潟に遊ぶや畫家鈴木柳塘と云へるが来て、翁に名字

昭和十一年四月

之リ 年
翁に謝したが、此時既に秋識の下に
古字子編の印章が捺されてあつたと
云ふ。



◎文人の印と雅號 (八)

○名と云ふものは俗を以て雅にするとも
出来る。若沖の名は若狭屋仲兵衛か
らつけたものだ。逸雲門下の村泉は、
商人にして書を描いたものだ、其商人
だと云ふ處から『
損せん』とすべし
とて逸雲が命名し
た者は、序だが仙
臺の梅關の名に就
て或人から聞く處
に依れば、之は清
人稼圃が命じたも
のだらうな。それ
から詩人森槐南の
號は何か是は戯の
言葉ではあるまい

高山生

一日を費し候、圖はナ
奈大溪(二名馬蹄溪)



其前にも宿つたところある天京と云旅館へ
宿つたが、天京は天屋京兵衛と云ふの
を縮めたのだ。時に主人は我輩に樓號
を題せんとを請ふたが、天京では俗だ
から試みに『添興樓』と命じ且つ筆を
走せて扁額を題した。すると同宿の五
峰は、僕は宿る『甜齋樓』と云ひたひと
云ふ。之は黒甜郷の意であらうか、我
輩は自分の方が善いと思ふ何々。



寸碧 (春琴閣伯の遺愛)

○浦上春琴は書は専門だが外に種々の
趣味もあつたと見ゆ、此人の遺什にな
か、面白いものがある。今度京都の
鳩居堂で圖らず手に入れた石の置物は
高さ一寸二分幅二寸三分許の小品で
あるが、春琴の手澤品で、箱の表に自
筆で隸書に『寸碧』と云ふ銘が書いてあ
る、これは韓退之の句から採つたので
ある。この石の來歴は別に一枚春琴自
筆の書付が添はつて居つたのが、いつ
しか失せて無くなつたは惜むべきであ
るが、來歴の大事は後の藏者鳥尾得菴
居士が箱の底に簡單に誌して居る。
○それに據ると春琴嵐山に遊びし折

自から大堰川より拾ひ上げたものと
書いてある。立派な紫檀の臺が正副二
個添はつて居り、袋も箱も精作である
所より見るに、春琴が拾ひ上げた時は
狂せん計りに喜びだ様子が髣髴として
目前にある如く想像さる。何れにし
ても春琴が非常に珍重し日々玩弄撫掌
手を離さざりしとは、石の光澤のつや
／＼して居るとも窺はれる
◎扱て石の形は無論詭ひ向て裾の廣が
つた形で右方に一山高く聳ひ左方に低
くて平板の處があつて、自然に土坡の
形をなして居る。色は陶器によくある
「ソバ」と云ふ色の少しく黒味を帯びた
もので、肌はさめ濃かに光澤は前に云
ふた通り袖で塗つたかの如くつや／＼
して居る。殊に嬉しいのは大低の自然
石は底が粗て凹凸のあるなどが常であ
るが、これは底が人工を加へたかの如
く真平であるとか此石の値打である、
大抵の姿勢がよいかから小品ではある

か、何となく大きく見え、大山を望む
如き概がある。
◎此石を見るにつけて感ずるのは日本
では印材用に供する石はトモ支那の
足元にも追付ぬが、こんな置物になる
と質も形も決して支那に譲らぬ。或意
味に於て支那よりも優つて居るやに思
ふ。日本には急流が多いから水と石と
闘ふ結果互ひに相摩して自然にいろ
／＼の形をなす、これも面白い石を出
す一原因であらう。但し土中より掘出
す石の中にも布流谷の如く皺の多き山
形のものも出る、又「まぐら」と云ふ石
の如き、鞍馬あたりより出る石の如き
皆珍とすべし特色がある。

趣味談叢



雙魚堂主人談

故陸奥伯(一)

○故陸奥伯の權謀術數は全くの天品で、一舉一動皆權謀術數の人であつたことは人の能く知る處である。其天品たる例に就て言へば渠よく奇策を案出し巧みに事宜を處すれども、渠が奇策妙案を然り出すは多く咄嗟の間に在るの多時、考推考を重ぬるも咄嗟案出の策より別に良策の出る譯でない云ふ事實からても証明される。世に現はれたる政治上の事績に就ては今改めて謂ふ迄もないから、今日は其私事に關する側面觀を話すとにしやう。

○それは陸奥と芳川顯正とに關する一場の笑話だ、芳川が洋行中に、百五十圓計りの指環を購つて來て、之を虎の兒

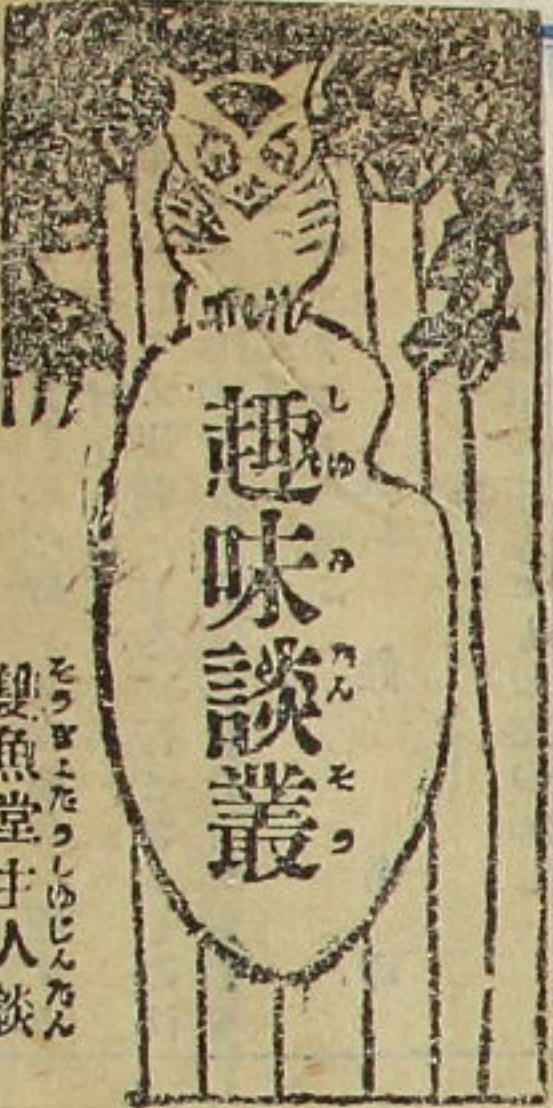
の如く珍重して居たが、フト或る藝妓に併り込み定情の印にとて此指環を與へた。すると陸奥は傍かに此事を探知し、一日三十圓を懐中して某亭に右の藝妓を招き、何喰ひ顔にて藝妓の指に嵌めてある指輪に着眼し、「之は良い細工だ、即金三十圓を遣るから俺に譲れ」と云ふて懐中から三十圓を取出し、突出した處が、其藝妓も日頃良い指輪だとは思ふて居たもの、斯る高價の物とも知らぬので、早速陸奥に與へた。すると數日の後、陸奥は某大臣を訪ふた時に、折筋隣室に芳川の來て居るを見すまし、主人と話次隣室へ聞かして、芳川を罵倒するので、芳川も構はず隣室から戸を排して入て來ると、陸奥は驚きたる様子もなく落付拂つて主人に向ひ、「此奴て先刻からお話しの男は」と云ひながら指環を箝めて居る指を芳川の方へ差出し、「何うだ、芳川、これに覺があるか」と詰つたので、今迄怒氣を含みたる芳川も流石に閉口した處へ更に、陸奥は主人に向

ひ「此指環は芳川が洋行中大枚百五十圓を投じて求めたもので、ソレを藝妓に併請されシブク與へたと云ふとが既に笑止千萬であります、然るに……と云つて、芳川を顧みて……何うです其女は私に之を唯だ呉れました、と言つて退けたと云ふとである。區々一笑話に過ぎぬが、陸奥の性質を窺ふに足るものではあるまいか。

故陸奥伯(二)

○陸奥が西郷の謀叛に加はつたのが發覺した時は、流石の陸奥も顔色土の如く直に役所から知邊の顯官に泣けて哀を請ひ、扱て愈々法廷に於て、取調の場合となるや、渠は飽迄事實を掩蔽し通す決心を持し居たが、時の掛判事たる玉乃世履の頼才に依り、流石の陸奥も終に掩蔽しおぼせ得なかつたと云ふ話がある。大隈伯の談に曰く、當時裁判所と云ふもマダ假屋で、自洲の隣りの所に屏風を立て廻し、其内に掛

判官の休憩所を設けた位の時であるから、少し聲高に談笑せば直に被告人に聞こゆる位の距離に在つた、扱て玉乃は陸奥を取訊べたけれども、仲々屈服する模様がないので、何々に案じ煩ふた。其内繼て午餐時刻となつたから、暫時休憩を宣告し、例の屏風構への裡に入り辨當を遣ひつゝ、故ら高聲に罵罵と話の中に「陸奥は仲々剛腹ものだけれども、既に証據の上つて居る上は致方がない」と一笑したのを、陸奥は之れを小耳に挿み玉乃の言に陥附ありとは知らず、此上は到底隠し切れぬと斷念し終に白状に及んだと云ふのだ。



雙魚堂主人談

故陸奥伯(三)

○陸奥の權謀術數は前にも一寸話した

が、生來の權謀性は其妾を納れるにも遺憾なく發揮せられて居る。渠が嘗て某青樓の藝妓に意を囑してよりは、日夜懐に忘るゝ能はざれども、之を色にも出さず、一日某船宿に内意を授け、自らは大きな紀州家の常紋をつけた黒羽二重の衣服を着て上席に座し、船宿の樓主を初め下婢に至るまで、御前若くば紀州の御前と呼ばしめ、宛がら紀州侯の思ひあらしむる對遇をさせて置て、其席へ意中の藝妓を遣へて周旋させた處が、藝妓も其見識の高さと樓主の待遇の鄭重なるに「マンマ」と一杯喰はされ、眞の紀州侯だと思込んだ。其夜は何事もなく歸り、數日の後に落籍話を持出した處が、藝妓の母親は奇貨とくべしとなし、「アレは藝妓になつた計りて疵のないものだから、千圓でなくては御望に應ずる譯には参りませぬ」と申込んだ。之を開た陸奥は平然として「千圓でも二千圓でも、ソレな事に頼着は要らぬ」と云つて氣前を見せたの

で、直に談判整ひ、式の如く青樓よりは赤飯などを配り、朋輩共をして其好運を羨ましめた。

○處が、これより先き陸奥は其藝妓が嘗て鳥尾子爵に關係があつたと云ふ事實を聞き、夫とはなしに鳥尾から其藝妓の品であるといふ金簪を貰ひ受け、竊かに之を所持して居たが、落籍料が千圓だと云ふ無疵だと吹聴するに及んで、陸奥は毎夕妾を詰るに疵の有無を以てし、終には例の金簪を示して鳥尾子爵の關係を責めるので藝妓も包むに由なく「ソレは無いと申されませぬが、藝妓の習ひなれば各め立をなされませぬ」と一笑したのを言質に取て置て、扱て藝妓の母親が、約束の落籍料を請求する段になると、陸奥は約束に違ふたからと應ぜず、果は「恚んな疵物は要らないから早速連れて歸れ」と云ふ付けた。處が藝妓の母親も、一旦落籍の披露した上、今更破談にな

譯で、公の室へ行き、一杯機嫌の公から種々の談話を聞いた。聖上から賜つた大森の恩賜館の事などは、當時未だ新聞記者の知らぬ中に公より直接に聞いたのも其時だ。

◎話次偶公の立身談に及びだ。公曰く、自分の立身の動機は全く大久保参議を失つたその時である。大久保参議は當時内務卿であつて、實に大任に當つて居られたのである。然るに不慮の變が起つたので、岩倉さんの云はるゝには、大久保が死んであとに人が無いと云はるゝも残念也、君はドーダ一つ内務卿になつて遣て見る氣はないかとの話。斯様な勧告に對し自分は實に容易ならぬ大任であると思つたが、決心して其の後任となつた。これが大任に當るの初めてである。

◎大久保公遭難の時恰も地方官會議が開かれて居つて、自分は其議長であつた。自分は地方官の大陶汰を行ふ積りて、地方官の人名表に罷めるの留

めるのと調べて見ると三種の符號をつけ(其の書類は今尙存して居る)將其の通り陶汰を行はんとして居つた處へ、大久保さんが遣られた。そこで自分は直に其後を繼ぐ事になつたから、自分は地方官の陶汰を見合はせ、今度内務卿の資れて地方官を見、實は大陶汰を行ふ積りてあつたが、見合はして一人も動かさぬ事にして、どうか諸君は舊に倍して勵精治績を擧げて貰ひたいと遣つたので何れも安堵して爾來大いに勉強した。大久保公の不幸の爲め渠等は意外の大赦を蒙たのである。



趣味談叢 雙魚堂主人談

◎堀田一即等はひとり大久保を殺すのみならず大隈をも殺す積りてあつた。それは渠等の白狀に依つてあとから分

つた。ナゼ大隈を見合はせたと云ふにこれも渠等の白狀であるが大久保を殺すと共に白刃を其場へ遺棄したので武器がないから己めたのである、然るに實は短銃が懐中にあつたので武器なしでは無つたのを、一つの目的を達した爲にツイボンヤリしたと見えて大隈に及ばなかつたは遺憾であると白狀した。大隈も實は危なかつたのである。

◎公は更に話頭を轉して日露媾和談判の事に説き及ぼして曰く、日露媾和の全權として自分は擬せられたに相違ない、自分に行けと云ふものも澤山あつたが引き止めるものも亦澤山あつたのだ。自分もいろいろに考へ惑つたが、聖勳によつて終に斷然行かぬ事に極めたのである。聖上は自分を召されてドウだ今度の談判の局に當る積りは無いかと御問へになつた、結局桂(首相)をも御前に召され、伊藤が談判に片かけても後は差支ないかと御問あり、桂は及ぶ限りは遣つて見ます積りと御答へ

した 聖上は自分と桂と對決の様子を御聞取になり、結局伊藤を遣ては戦争を繼續するときに困ると云ふ御思召より、行かぬ方がよろしいと御聖慮になり、それで小村が出掛ける事になつた。



趣味談叢 雙魚堂主人談

◎媾和條件か、無論償金は取る積りて居つたのだ。勿論露西亞では償金と云ふ名義では出さぬ、樺太を半分譲つて戻すと云ふ名義で何程か出す底意であつた。それが談判中に妙な事となつて樺太半分と云ふ事になつた。これには廟堂でも頗る困つたが、樺太半分は不足であるからと云ふて戦争を續けると何んだか割地を得るのが戦争の目的であるかの様に見えて面白く無い。己

故春畝公(下)

ひを得ずして我を折るとになつたが、實は先方から樺太の半分も出さぬと言ひ張られても戦争の繼續は名義の爲めに困つたのである。

◎あの談判は小村でなく自分が遣つたとしても到底輿論を満足させる迄に行かなかつたと思ふ(小村よりは少しは手際にゆく位なものであつたらう)自分分は行つて其甲斐なく、行かんで却て大いに役をなした。その點は 聖慮の通りであつた。

◎談判が甘く進行するときは政府も樂なものだが、現て六ヶ敷なつて來ると誰も尻込をやつて談判地から來る照電に通信を書くものも無い、重なる訓電は皆な自分が書いたのである。

◎公は此等の話より自分は常に政府にあつて難局に當つた、山縣は事が六ヶ敷なつて來ると「あれは武人であるから」と云ふので武事に逃れる。松方は「あれは財政の方だ」と云ふので其の方に避ける。自分は政治専門と云ふので



趣味談叢 雙魚堂主人談

辭するとも避くる事も出来ぬ。今は朝鮮だけだから先づ樂なものさと語られた。是が最後に我輩が公に逢つた時の談話であるが、流石の當時の様が偲ばれるので、君に談した譯である。

●郵便局利用策

▲清原郵便管理局長の談
 國家業務の一として郵便機關が人民に
 對する義務として且つ最も重要な關係
 を有するものなり管理上郵便局長は
 郵便を利用するものなり管理上郵便局長は
 郵便を利用するものなり管理上郵便局長は
 郵便を利用するものなり管理上郵便局長は

●選言支那の來感

▲新潟市の納稅振替貯金 新潟市役所
 より大蔵省へ電達したる市公金納稅
 振替貯金實施の件、日認可の指令
 を托され岩間氏は舊甲武の總務課長な
 りし關係が同件共計一日大蔵省より

て其の増額率を一般官吏に準ずるや
 其の増額率を一般官吏に準ずるや
 其の増額率を一般官吏に準ずるや

其の増額率を一般官吏に準ずるや
 其の増額率を一般官吏に準ずるや
 其の増額率を一般官吏に準ずるや

其の増額率を一般官吏に準ずるや
 其の増額率を一般官吏に準ずるや
 其の増額率を一般官吏に準ずるや

▲三日中野町あるへく右路可の上
 らに新築工事にて、し本年内に竣工
 するに決意を定むるなり

▲七月十六日長岡市に於て開くと
 らし、右に付、大蔵省の認可あり、同月十
 日新築工事を開始す

▲中野町の實業學校
 中野町立直江村實業學校、新井縣
 立中野町立直江村實業學校、新井縣

▲中野町の實業學校
 中野町立直江村實業學校、新井縣
 立中野町立直江村實業學校、新井縣

▲中野町の實業學校
 中野町立直江村實業學校、新井縣
 立中野町立直江村實業學校、新井縣

▲中野町の實業學校
 中野町立直江村實業學校、新井縣
 立中野町立直江村實業學校、新井縣



▲沙翁と近松

◎兎角文樂座のとに興を持って話をする
 様であるが、茲にも又一ツ話すとがあ
 る。それは近頃同座に遣つて居る近松
 の名作「釋迦如來誕生會」の事、これ
 は昔は遣つたものだが、近年時勢が變
 つたため傾と遣らずに居た者である。
 之は大坂の三代目野澤吉兵衛が節付を
 した儘、試みさして没したもので、本年

は野澤の五十回忌に當ると云ふ處から其紀念の爲め攝津等が苦して出版物に主人公が釋迦と云ふ一種の人物であるから、之を義太夫にして莊嚴なる感興を起さしむると云ふは、何れも困難の事である。昔も今も是には非常に苦心したと云ふ話である。

○作去我輩は今此で藝評はせぬ。話はこの近松の作と沙翁の「ベニスの商人」と同一の脚色があると云ふ點だ。元來沙翁と近松とは頗る類似の點が存して居る、嘗て坪内博士などが廿何點と數へた程で、文藝上興味ある問題の一である。其作者が一方は西方の文豪、一方は東方の文豪なることから、文章の書振から、結構脚色の相似から、乃至其他の點に於て暗合の點が多い。特に此「釋迦如來誕生會」と「ベニスの商人」とは著しい暗合である。併し時代に於て沙翁は近松より早きと五十年前計りであるから、之に同一脚色ありとすれば近松

が沙翁から取つたかも知れぬと云ふ非難も起らうか、當時の時代なれば近松が西歐の文學を味ひしとも覺へず、結局近松の脚色は佛典に根柢を有し、材料をそれから取つたものである。

○佛典の事實と云ふは、帝釋天が釋迦の本身たる優尸那種の尸毗王を試みんとて、巧變化師の毗首羯磨天を語らひ毗首羯磨は鳩に變じ帝釋は鷹に變じて種々のとをやつたと云ふとて、之を翻案して般特と提婆達多の間に作り變へたのが近松の作意だと思ふ。全体劇の時代物は考據を遡つて古い典籍より得ると云ふが作者の手段であるから、此點よりして判断しても佛敎隆盛の元祿時代に於て、近松が佛典より翻案したものに相違あるまいと思ふ。



雙魚堂主人談

▲沙翁と近松(下)

○翻つて沙翁の「ベニスの商人」の根原は何處からであらうか、之に就て西洋諸家に於ては、波斯や埃及や土耳其の古代に於ける傳説、神話に斯う云ふ意匠が多いから、それから取つたものであらうと云ふ説がある。處が近世彼地に於ても、佛典の研究からして得たものであらうと云ふ説をなすものが出来た。トルネス氏の如きは、或印度の物語及び「マハバタラ」に見えたりとて、彼の帝釋天(因陀羅)の鷹のとを載せ、これ「ベニスの商人」の脚色の源泉であらうと云つて居る。そこで之を概括して見ると、此佛典の事實が一方波斯、埃及、土耳其に傳はりたるものに依り、沙翁の「ベニスの商人」作られ、一方に於ては四五十年の後、支那譯に依りて偶然にも近松之を用ひ、斯くて東西の兩文豪をして圖らざる暗合をなさしめたものであらう。此が最も趣味ある點だと思ふ。



雙魚堂主人談

山陽を中心として 諸家の逸話(上)

○大坂に客居の日、近藤南洲を訪ふ。南洲は螢雪軒叢書などの編纂あり、大坂にては著名の老儒なり、愛媛二名島の産にて先人は名洲と云ふ、尾藤二洲も同郷にて二洲の號も同じく島名より來ると云ふ。南洲は芳野金陵門人として毫も衰へず、刺を通するや直ち

に書齋に延き城府を設けず如才なく談論する所、なか／＼世故慣れたるもの也。近業何ぞと問へば支那の書論を輯めて書論叢書を出せんとす。又傍ら左傳を注しつゝありと云ふ。成る程案頭幾種の左傳を置き五六紙の草稿も見受けたり。翁は中井履軒を崇拜すると覺しく、履軒の七經逢原を稱賛しつゝその稿本左傳之部を示されたり。書齋に在ること半日、其の珍藏の圖書十數部を展覧す、中に稀觀のものも數種ありしが、ここには其の記事を畧し、先賢の逸事に關する談話の二三を採録せん。

○中井履軒は酒を好み案頭常に杯を置き、終日飲みながら讀書されたり。履軒の頸邊に大瘤あり、履軒酒を飲むとさ必らず之れを撫して下物に代ふ、人に向つて曰く、學問爵積して終に此の瘤を爲すと。

○履軒、五井蘭洲に學ぶ、蘭洲講釋の

時にエヘン／＼と咳掃らひを爲す癖あり、門人戯れに其の回数を知り講釋するの後同門の履軒に向つて曰く、卿は先生の咳掃ひの數を知るや、履軒立ちこゝろに答ひ且つ曰く、吾れ今日の數を知るのみにあらず前回の前々回も其又前回の數をも記憶すと、試みに其の數を擧ぐ、果して違はず履軒曰く、吾故らに數ふるにあらず、吾が頭腦の中に十露盤あり、先生一たび咳掃をなせば腦中の算珠自然に動くくと覺しく、吾れ知らず其の數を知ると。蘭洲密かに之れを聴き歎して曰く、履軒強記後來必ず成すあらんと。

◎菅茶山は講釋の時は、餘程謹嚴の態度にて、毎に鞭を手に持ち坐睡するものあれば、之を以つて打ち、毫も假藉せず、其の鞭を名づけて喚醒鞭と云ふ。◎篠崎小竹の先代は書物屋なり、それらの爲めに家富みたり、嗣子の槩は養子にて養父と筆跡酷似幾んど辨じ難し

小竹も棋の名人なりしが、養子は初段免許の名人にて、對局すると養父の方がいつも敗を取れり。



警察事務の調査 民政部は...

▲日本製品と陳列

日本製品と陳列 日本製...

▲低氣壓の所在

低氣壓の所在 中央...

五和日大學圖書會

五和日大學圖書會

以下
14丁
白紙

早稻田大學圖書館

學生今と昔(上)
氣質(附、縣學生の氣風)

市島 謙吉氏談

會長は壯士會員は紳士 誰れもいふことであるが、昨今の學生は如何にも氣魄が乏しい。而して如何にも華美に流れて居る。之れを自分等の學生當時に比べると、た話にならぬ程の相違を來して居る。早い話が新潟縣の學生に例を引くと、早稲田には縣の學生が絶えず二百人位は居る。而して越佐會といふものを設けて、毎年數回例會を開き、自分は其の會長として聊か盡瘁して居るのであるが、此の會などが矢張り現代學生氣質の通例に洩れずして、甚だ華美に失して居る。餘興の趣向なども頗る贅澤な工夫を凝らすのが常であるため、いつも自分が出ては模様替りさせるといふ始末。要す

るに會員は紳士、會長は壯士といふやうな格である。斯かることは單り新潟縣學生のみ然るに非ずして、一般の學生が皆全般的なのである。

▲乱暴なる牛津學生

數年間オックスフォールドに留學して、此程歸朝した男がある。此の男學生から非常なる蠻カラであるが、此の蠻カラ先生も、流石にオックスフォールドの蠻風に驚嘆して居つた。其の話によると、全校學生の乱暴なことは、殆んど言語に絶した處で、上級生が下級生をいぢめる位は當り前のこと、夜間などは通行人に煮湯を浴びせかけるとか、其他さまざまの惡戯をやつて、殆んど手も着けて見やうが無い。それでも婦人に對しては、感心に禮節を守つて、惡戯などは一向にしない。且つ其の惡戯の仕様も、甚だ男らしく、さつぱりとした處がある。酒興に乗れば、時と

して橋の一つや二つを焼き落してしまふこともあるが、酒覺めて後、翻然其の非を悔めて、更らに之れを架け替へる。倫敦の橋といへば、いくら安くて一萬圓乃至二三萬圓を要するのであるが、其の架設位のことには、學生の身分としても平氣でやつて居る。學生の氣風が凡べて斯ういふ風であるから、教員中には随分手痛い目に逢はされた者があるが、校長だけは大に尊崇を受けて居る。それは常に學生と事を共にし一緒に食事をするとか、散歩をするとかいふ遣り方なので、其の人格は學生崇拜の的となつてゐる。が、要するに學生氣風の亂暴なことは、日本人などの想像以上で、我等をして評せしむれば、アングロサクソン人は黙だといふより外は無い云々と語つた。予は此の蠻カラ先生の驚嘆に大に興味を感じたが、それと全時に自分等の學生當時のことを思ひ起さざるを得なかつた。實

早稲田大学圖書會

自分等の學生當時は、其の態度に於て、決してオックスフォード學生に遜らなかつたのである。(在京記者)

學生今と昔(中)

(附、縣學生の氣風)

市島 謙吉氏談

見附次第鉄拳制裁 予の大學

入つた當時の如きは、一般學生の氣風が、矢張り前に云ふたオックスフォードの學生のやうであつた。當時學校は一つ橋にあつたが、校長には加藤弘之氏の如き、兎に角も俗吏氣質を脱した學者を戴いて居つたことであるから之に對しては、幾分の尊敬を拂ふて居つたけれども、其他の教授連に對しては、随分反抗もし、横行もやつた。殊に幹事などいふものは眼中に無かつた所で、幹事室の前で小便をすることなども珍らしくなかつた。而して學生間の制裁は甚だ嚴にして、不品行の者や

惡徳を働いたものに對しては、學校の處分を待たずして之を懲戒する。妾を蓄へたり、地獄買をするものなどは無論容赦せぬ。吉原などへ行くにしても、學校の備帽を被つて、堂々として大門を這入るのはよいが、身形を變へて狐鼠々々を行くものに對しては、見附次第に鉄拳制裁を加へたものであつた。

一錢の會費にも苦情

萬事が斯ういふ風だから、會の如きも至つて質素で、會費は入抵一錢か二錢位のものそれにさへも取り過ぎるとか何とかいふ異論が起つたものであつた。而して學生全志の相集まれば、必ず激越の調子を以つて議論を闘はすのが常であつた。其屬等へ遊びに行くのも、十錢銀貨を一つ袂の中へ入れて、一日遊び廻つたもので、焼芋か何かを晝食にして例に依り盛んに議論を上下したのであつた。斯く議論に重きを置いたものであるから、自然贅澤な飲食などは、顧みてる邊がなかつたのである。

電車に乗ても眩暈

それが昨今では何うであるかといふに、學生間に議論を闘はすなどいふ風は、全くなくなつて了つた。寧ろ議論などする者は野暮だと云ふて、頭から斥けられるやうになつた。丁度帝國議會が全様の選路を辿りつゝ、墮落して行くのである。以上のやうな昔の學生氣風と、今日の學生氣風と、どちらがよいかは、今急に言ふことが出来兼ねるし、殊に昔の學生のやうに、とすれば亂暴狼藉を働くなどの事は、無論獎勵す可き限りでは無いが、兎に角も當年の學生の如き、潑刺たる元氣を養ふことは、將來活社會に立つて、弊端錯節に處する上から言ふても、最も必要のことであらうと思ふのである。華美文藝にして、氣魄の乏しい今日の學生が、在學中から神經衰弱に陥つたりなどするのは、もとより當然のことである。就中文學を遣る學生などの中には、青年の生氣といふものが全然無くて、電車に乗

つても貯蓄がする、牛肉を食ふても胸がひかつくなごといふ呆れ返つた連中がある。誠に以て心外に堪へぬことと言はねばならぬ。(在京記者)

學生今と昔(下)

(附、縣學生の氣風)

市島 謙吉氏談

最も興味ある回顧

且つ又書

生自身の爲めに言ふも、學生時代に頼りに醫澤なことをやるのは、好ましくないことである。人の一生の回顧の中で、何が一番楽しいかと言へば、それは書生時代のことである。紳士の眞似は將來社會に出た時に、いくらでも出来るが、書生の樂みは、いかに求めても二度の來るものではない。疊一枚敷の處で徹夜の勉強をしたとか、三疊五厘の天賦羅に舌鼓を打つたとかいふ事は、後日の語り草としても、最も興味

のあることである。この興味のある書生生活を、われから求めて紳士的にする當今の學生は、畢竟何んの意であるか。我輩の解するに困しむ所である。

強めて天性を曲ぐ

求職難の

聲は、昨今學校出の學生仲間には充ちて居るが、中には之れを恐るゝのあまり學生時代から手代の眞似をして、つとめて商人風にならうとする者がある。が、實際の状況を見るに、會社や商店の側では、却つて之れを厭ひて、寧ろ天真なる人物を擧ぐの方針を取つて居る。何道如何なる人間を使ふにしても、之れを自己の會社若しくは商店の型に入れて了ふには、少なくとも二三年を要するのであるから、之等の處に於て、なまじひに天性を曲げた人物を厭ふのは、無理ならぬ所である。要するに斯かる點に於ても、現代の學生は、自己を詐り、併せて他を詐りつゝあるのだ。

縣學生の長處短處

尚且序な

がら新瀉縣出身學生の氣風について一言し度い。縣の學生は誠に從順でもあり、且つ勉強もよくするが、缺點はと言へば、兎角遠慮をし過ぎる嫌ひがある。隨つて言ふ可きことを言はぬ場合が多いので、學校に於ける成績なども、勝れてよいと言ふ方では無いが、元來馬鹿では無いのだから、落第などをするものは少ない方である。つまり長短兩つながら茲にあるのであらうが、是はくば此の短處を除くやうに工夫あり度きものである。

矯正を要する性癖

早稲園の

越佐會なども、前に話した通り、在京會員の數丈は二百名以上もあるのだが、毎回の出席者は至つて少ない。近來に至り毎年一回づつ大隈伯爵の座敷を借りて大會を催はすことにしたので此の時だけは百名位の出席があるが、

之れすらともすればダレ氣味になるのは、歎ず可きことである。畢竟會員各自が引込思案を主として居るからであらうが、斯かる性癖は、將來活社會に處する上から言ふても、是非とも矯正せざる可からざる處である。(在京記者)

朝鮮本の話

市島謙吉

我國は書物と云ふ一點に於ては朝鮮から感化影響を受けた事は尠くなかつた、此れは如何なる理由かと云ふに、彼の文録の役即ち豊太閤の朝鮮征伐の時に朝鮮國內を非常に蹂躪した、其の甚だしかつた事は恐らく朝鮮國あつて以來と云つても宜い位であつた、其の結果として朝鮮國內にある書物は手あたり次第に持ち歸つて來た、此れが爲に朝鮮國內には善い書物は盡きて了つたと云つても宜い位であつた、此時に持ち歸つた朝鮮本の感化が我書物に對して尠からずあつたのだ。

天正頃の名醫に曲直瀬道三と云ふ人があつた、彼は江戸に住んでゐた人で、今でも内務省の附近に道三橋と云ふのがあつて、曲直瀬道三の邸宅のあつた處だ。此の曲直瀬道三が浮田秀家夫人の奇病に罹りたるを治療した、秀家大に喜んで禮として何かやらうと云ふ話の出た時、然らば彼の朝鮮からお持歸りの書物を頂戴しないと云ふ事で秀家から朝鮮の役書數十卷を獲たと云ふ事がある、此の朝鮮本

には養安院蔵書と云ふ版が押してある、此の養安院と云ふ號は後陽成帝不豫なりし時道三診に侍りて殊に効があつたので養安院と云ふ號を賜つたので、後世養安院蔵書と云ふ版のある蔵書が夥しくあつた、此れが後世まで残つてゐた朝鮮本である。

朝鮮も文録の役前までは書物の種類も多し文化の開けてゐた國であるから、書物の形式のみならず其の内容に於ても大に感化を受けたのだ、元來朝鮮には諺解と云つて俗語即ち諺文で經書などを書いた我國の國字解と云ふやうなものがあつた即ち經書を通俗に解釋したものである、林道春などが是を見て至極面白いものだと云ふので是に倣つて我國の諺解と云ふ様なものを作つて世間に流布した、内容に於ては此様な感化影響を受けたのだ。

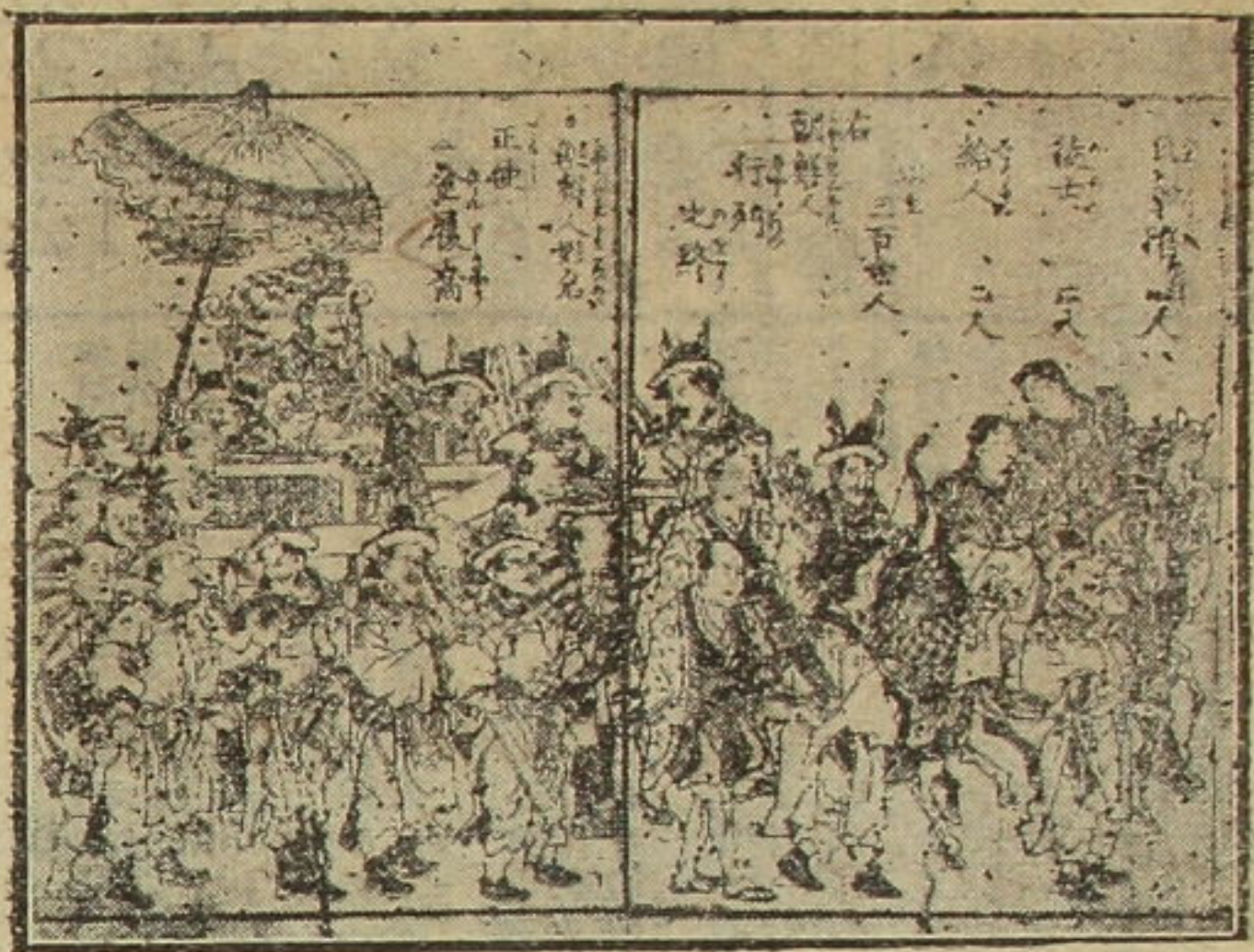
形式の方から云へば天正頃までは我國の書物の表紙は多く濫引であつて寛永となれば大分下るがそれでも濫引で古書通が見れば何年頃の書物か直ぐ判るのである、處が朝鮮本の影響として蓮華唐草を表紙に押しつけて浮かせること云ふ様式になつ

た、要するに蓮華唐草を打ち込んであるのが表紙の形式である、此れなども學ぶべしとして爾來表紙もこれに倣つたのである、此れなども朝鮮本の影響の一端である。

一体朝鮮は今の李朝になつてからは大した事も無いが、高麗朝にあつては文化大いに進み支那を凌駕するに至るまでは行かなかつたが、殆んど雁行の位置にあつた。

其れ故に書物なども其の版式、字体の大ききなき能く整つてゐて雄大である、雄大と云ふ點に於ては支那以上の趣きがある、高麗朝に出來た或書物の如きは支那人以上である、例へば之れは單に一例であるが高麗版の大藏經の如きは慥かに世界に比類のないものである、形式の雄大なるのみならず、内容の正確なる點に於て支那は一步を譲らねばならぬ、支那の宋元版の大藏經などは立派なものであるが、然し内容も整はず敷も足らない、校正も高麗版に比すると一步を譲らねばならぬ。

高麗版の大藏經が世界無比なりと云ふ理由は、彼の高麗朝は佛法の盛なる時代に僧侶の方から運動した結果であつて、



尙朝廷でも屢々大藏經を印刷せしめた、此の高麗版の大藏經は日本では國寶にするとかしないとか云ふ話のある海印寺にある、由來朝鮮は蒙古などから襲撃を受け其度毎に兵火に罹り大藏經も焼けたので國王は祈願して二度まで作つた、此の作り直したと云ふ事に就いては藏書家の間に説があるが二度までは作つたものと云ふのが定説である。此の大藏經を作り

直す事は餘念を入れたものと見え、物の木に見える處によると、世界中に知れてる限りの經文を参照したもので、其の一例を云つて見れば契丹本を校正用に備へたと云ふ事であるが此の契丹本

は嘗て藏書家と雖も眼に觸れた事はない、此の位まで大仕掛にやつたものである、又我國の天平時代の古寫經までも取寄せて參考にしたと云ふ事である。嘗て文錄時代に或る高僧が十年も費して比較研究を試みて高麗版の完全なる事を發見し其結果として一部の書物が出來た位である。斯くの如きは實に朝鮮の文化の進めるを示すものである。

高麗朝を過ぎて文化を助ける國王ありて、年號は忘れたが儘か永樂年代だと思ふ、此の時代に何でも天子二代にかけて眞鍮の活字を作らした、實に我國の木活字などは異り立派なもので、其時分に作つた書物など如何にも堂々たるものにて、紙質もよし活字の体裁も大きき大形で實に堂々たるものであつた。其れ程までに發達したるものが文錄の役

來ぬ位になつた、即ち文錄の役が濶を劃すると云ふ事になつた、之れが朝鮮の書物の歴史の概要である。

朝鮮人樞東鎮の横山健堂氏の爲に
朝鮮文字にて其姓を記せるもの
디 훈구 우. 훈
관 동진
관 동진
관 동진

何にしても朝鮮は幾度も兵燹にかよつたが爲めに極めて書物の少い様に思はれる支那のやうに澤山はない、外國の掠奪を受けた爲めに滅じたものもある、未だ版に出来ないもので貴重なものもある、或るものに至つた朝鮮に一本しかないとか二本しかないとか云ふものもある、我國の「大日本史」に相當する「高麗史」の如きは朝鮮を探しても餘り澤山はあるまいと思ふ日本でも所藏して居る所は十ヶ所位なのである。

藏のを借りて校止したと云ふ話である、此書などは多くある筈なるべきに我國でも大書庫の一つしか残つて居ないといふ有様である。詩文になる朝鮮の藏書家が所藏して居るか、奎章閣の書庫に幾分か残つてゐる位で文學の材料となるべきものは至つて少いやうに思はれる。斯かる有様なれば日韓合併と共に大に朝鮮本を大切にする必要がある、幸に我國の今日では大分手に入れた、例へば滿鐵の如き特に學者を派遣して搜索せしめ地誌、人物傳など大分蒐集した様である、又白鳥博士が成田の圖書館の爲めに集めたものは数は少いが其れでも能く集めてある、更に手をひろげて散逸しない前に搜索し蒐集して置く必要があらうと思ふ彼の養安院藏書の如き一時大にあつたが朝鮮文化の餘熱のあつた時代、支那人の楊守敬が店頭にある朝鮮本を見て恐らく

若し之れが保存されてゐて尙合邦と共に蒐集されたならば朝鮮本國よりは其數に於て多かつたのである。朝鮮本も今までは珍本として取扱つて居たのであるが將來實用上より必要な事が生じて來る場合があらうと思ふ。又彼の金石文の如きも貴重なるものにて歴史の參考になる事が多い、鴨綠江附近にある和寇の碑の如きは明治十七年に初めて參謀本部の參謀が発見したものであるが、之れに依つて見ると世界の歴史はおろか支那朝鮮の歴史にもなく、只日本の歴史のみが明記してゐる彼の百濟征伐の如き明かに此の碑の文面によつて確むる事が出来るのだ、此れは支那では丁度六朝時代(今より千七百年前)に當る碑で此の碑文には百濟を百殘としてある此時分にはかう書いたのだらう、只日本の歴史とは其年代に二百年程の差があるとの事である。何れにしても日本の歴史が之れによつて確められたと云ふ有力なる證據を得た譯である。斯くの如く金石文は實に貴重すべきものであると云ふ事が知れやう。(談)

家、西行、光悦と三名家の手蹟の揃つてゐる點に於いて、洵に天下の逸品と謂つてもよい。茶掛として此の位の珍幅は、先づ餘り他に類があるまい。

此の手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、行で鳥渡思ひ出したが、私の或友人の所藏に、容齋の描いた西行の圖へ東湖が贊をして、それに狂歌入りの手紙の添はつたものがある。これは東湖が或時

たなどは、甚だ不見識な誹を免れないが、それはさて措き斯ういふ工合に、定

家の『明月記』は裏である。然るに光悦之れを悟らず、主客を顛倒して箱書し

つに相違ない。そこで此の両面の表裏をいふと、西行の消息の方が表で、定

家の裏を利用したものが少くないからで、案ふに、是れも冷泉家から出たその

は、定家の『明月記』の冷泉家に傳はつたものを見るに、その用紙は何かの反

のも、かの有名な『明月記』の断片であること殆ど疑ひを容れない。といふの

の師である)勿論これは定家卿に與へたもので、その裏面の定家卿の筆といふ

といふやうな文句らしい。そして宛名は書いてないけれども、(定家は西行の歌

位。圓

日節會にも御出仕はれまじきとや。尙々可參存れ、恐々。

いかゞいべき、今夕又少々ばかりいへる輩もいはんすらんと存れ。如何、今

頗る讀みにくいが、

とは光悦の號である。さてその消息の文はと見ると、如何にも洒脱な達筆で、

には『圓位之消息權中納言定家之記録表記。大虚庵』と記してあつた。大虚庵

幅を入れた箱の表には例の光悦の美しい文字で、『西行法師文一軸』と題し、裏

は、西行法師消息の一軸であつた。嘗て光悦が之れを愛玩したものと見えて、

その時氏の所藏の珍幅など種々見せられた中、私の最も垂涎に堪へなかつたの

朝日の上野理一氏に招かれて、同好の趣味談に愉快な半日を過した事がある。

それから此間中私は、所用あつて京阪の方に暫く滞在して居たが、偶々大阪

があらうと思ふ。

とすべきものであらう。いづれ本誌などにも、その實物を寫眞して掲げる機會

でも、大に貴重すべき價值がある。之れを手紙趣味の上から見ても、極めて珍

に通までも今の世に現はれたといふことは、實に歴史上特筆すべき大發見で、單

程先輩である。所が羲之の肉筆ですら今日は到底見られない、否恐らくは全く

になつて居たが、王羲之はやうく二十歳前後、李柏の方が同時代とはいへ餘

人の筆致といふことが窺はれる。成程年代を調べて見ると、當時李柏は四十歳

書風は行書のやう堅いやうな、そして何處かにかの王羲之などと略ぼ同時代の

に與へた所のもので、丁度我が邦の檀紙のやうな厚ぼつたい紙に書いてある。

(三)

手紙雜誌 第九卷 第參號

手紙雜誌 第九卷 第參號

家、西行、光悦と三名家の手蹟の揃つてゐる點に於いて、洵に天下の逸品と謂

つてもよい。茶掛として此の位の珍幅は、先づ餘り他に類があるまい。

行で鳥渡思ひ出したが、私の或友人の所藏に、容齋の描いた西行の圖へ東湖

が贊をして、それに狂歌入りの手紙の添はつたものがある。これは東湖が或時

此の手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

一空飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

一笠飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

此の手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

行で鳥渡思ひ出したが、私の或友人の所藏に、容齋の描いた西行の圖へ東湖

が贊をして、それに狂歌入りの手紙の添はつたものがある。これは東湖が或時

この手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

一空飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

一笠飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

此の手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

行で鳥渡思ひ出したが、私の或友人の所藏に、容齋の描いた西行の圖へ東湖

が贊をして、それに狂歌入りの手紙の添はつたものがある。これは東湖が或時

この手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

一空飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

一笠飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

此の手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

行で鳥渡思ひ出したが、私の或友人の所藏に、容齋の描いた西行の圖へ東湖

が贊をして、それに狂歌入りの手紙の添はつたものがある。これは東湖が或時

この手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

一空飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

一笠飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

此の手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

行で鳥渡思ひ出したが、私の或友人の所藏に、容齋の描いた西行の圖へ東湖

が贊をして、それに狂歌入りの手紙の添はつたものがある。これは東湖が或時

この手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

一空飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

一笠飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

此の手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

行で鳥渡思ひ出したが、私の或友人の所藏に、容齋の描いた西行の圖へ東湖

が贊をして、それに狂歌入りの手紙の添はつたものがある。これは東湖が或時

この手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

一空飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

一笠飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

此の手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

行で鳥渡思ひ出したが、私の或友人の所藏に、容齋の描いた西行の圖へ東湖

が贊をして、それに狂歌入りの手紙の添はつたものがある。これは東湖が或時

この手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

一空飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

一笠飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

此の手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

行で鳥渡思ひ出したが、私の或友人の所藏に、容齋の描いた西行の圖へ東湖

が贊をして、それに狂歌入りの手紙の添はつたものがある。これは東湖が或時

この手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

一空飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

一笠飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

此の手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

行で鳥渡思ひ出したが、私の或友人の所藏に、容齋の描いた西行の圖へ東湖

が贊をして、それに狂歌入りの手紙の添はつたものがある。これは東湖が或時

この手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

一空飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

一笠飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

此の手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

行で鳥渡思ひ出したが、私の或友人の所藏に、容齋の描いた西行の圖へ東湖

が贊をして、それに狂歌入りの手紙の添はつたものがある。これは東湖が或時

この手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

一空飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

一笠飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

此の手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

行で鳥渡思ひ出したが、私の或友人の所藏に、容齋の描いた西行の圖へ東湖

が贊をして、それに狂歌入りの手紙の添はつたものがある。これは東湖が或時

この手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

一空飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

一笠飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

此の手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

行で鳥渡思ひ出したが、私の或友人の所藏に、容齋の描いた西行の圖へ東湖

が贊をして、それに狂歌入りの手紙の添はつたものがある。これは東湖が或時

この手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

一空飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

一笠飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

此の手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

行で鳥渡思ひ出したが、私の或友人の所藏に、容齋の描いた西行の圖へ東湖

が贊をして、それに狂歌入りの手紙の添はつたものがある。これは東湖が或時

この手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

一空飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

一笠飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

此の手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

行で鳥渡思ひ出したが、私の或友人の所藏に、容齋の描いた西行の圖へ東湖

が贊をして、それに狂歌入りの手紙の添はつたものがある。これは東湖が或時

この手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

一空飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

一笠飄然忘此生。銀猫幸勿惹虛名。人間何物堪相愛。唯有芳山千樹

收めて仕立てた所が至極面白い。畫贊の詩は、

早速一詩を題して手紙を添へて之れを返したといふ、その繪と手紙とを一幅に

端が少々鼠に喰はれて居た、そこで誠に延引の上重々申譯がないと云つて、

此の手紙の宛名の鈴木鐵藏といふ人の紹介で、他から西行の畫贊を依頼され、

行で鳥渡思ひ出したが、私の或友人

い。今一通私の所蔵してゐる手紙よりは、寧ろ此の方の出来が善いやうである。

所謂茶人なども、概して手紙の幅を珍重するやうだが、元來我輩とは趣味の標準が違ふから、随分可笑しい話を折々耳にする。先頃私の知つてゐる某骨董店へ、何とかいふ茶人が尋ねて来て、店にあつた松花堂の手紙の幅を熟々眺め、「これは好い出来だが、惜しいかな文言が些長すぎる」と云つた。主人は不思議に思つて、その譯を聞いて見ると、「いや、茶席などには長文句は最も禁物で、一通讀み了るさへ三十分もかゝるやうではなかく、數ある珍品を一々見せる

(贈寄氏城春島市) 書業紀念祭孔子

明治三十三年四月念四孔子祭紀念



志願 共道子筆
賀 末元章
入云
孔子、大哉孔子
孔子以前既無孔子
孔子以後更無孔子
孔子、大哉孔子

譯にはゆかぬ。手紙の幅は短いものに限ると、私は後で此の話を聞いて、茶道の墮落も斯うなつては救ふべからずだと思つた。好いぢやないか、もどく趣味上の道楽だもの、一通一時間かゝつて讀まうが、或は一日かゝ

らうが、時を忘れて趣味を樂んでこそ、始めてその趣味の三昧にも入り得るといふもの。であるから、茶人の非常に喜ぶものでも、我輩には一向感心の出来ないものも少くない。今言つた所謂茶人の如きは、我輩の眼からは趣味の外道である。

○豊公の面目躍如たる前田家重寶の古文書

先頃前田邸に、聖上の行幸遊ばされたる前、前田家にては先祖傳來の寶物中、假令は伏見花園後醍醐三帝の御宸翰を始め、史上有名なる大臣大将の愛劍、さては國史に關する古文書等、世に最も珍らしき寶物を陳列して天覽に供へ奉りたるが、中にも文祿元年夏五月豊太閤が朝鮮征伐に際し、肥前名護屋の大木營より世嗣たる關白秀次に宛て、世界を併呑して我が帝都を北京に移し、時の天子を奉戴して支那を統治し、附近の國々十ヶ國を以て天子の供御に宛て、關白秀次には百ヶ國を興へ、而して從來の日本國には若宮様か八條院を立てり君主となし、其他加藤小西の名將等には北緯の國々を自由自在に興ふるといふ、豊公當年の雄圖を窺ふべき快心の書を御覽じ、

聖上には殊の外御満足に思召され、徳大寺侍從長に何呉れとなく御物語ありたるやに承る。尙此書は關白秀次に興へたる軍令狀といふべきを、當家五代の祖松雪公は豊公の計劃時機猶早かりしといふことより、關白豊臣秀吉三國置大早計と命名したるなりと。因みに、原本は檀紙にして縦一尺四寸七分、横一丈二尺五寸の巻物也。

Table with multiple vertical columns, likely a ledger or record book, with faint text visible through the paper.

余が實業界に入る卒業生へし拾一條の忠告

△就職後不成績の卒業生

得る卒業生

私が實業界に入らんとする早稲田大學生に於て平素教訓して居ることは、第一「心なれと云ふことである。ドウも近來の學は、動もすれば高地位を占め、或る一種の型を有つて居る者が少なからぬが、之が即ち實業界では受けが惡いのである。

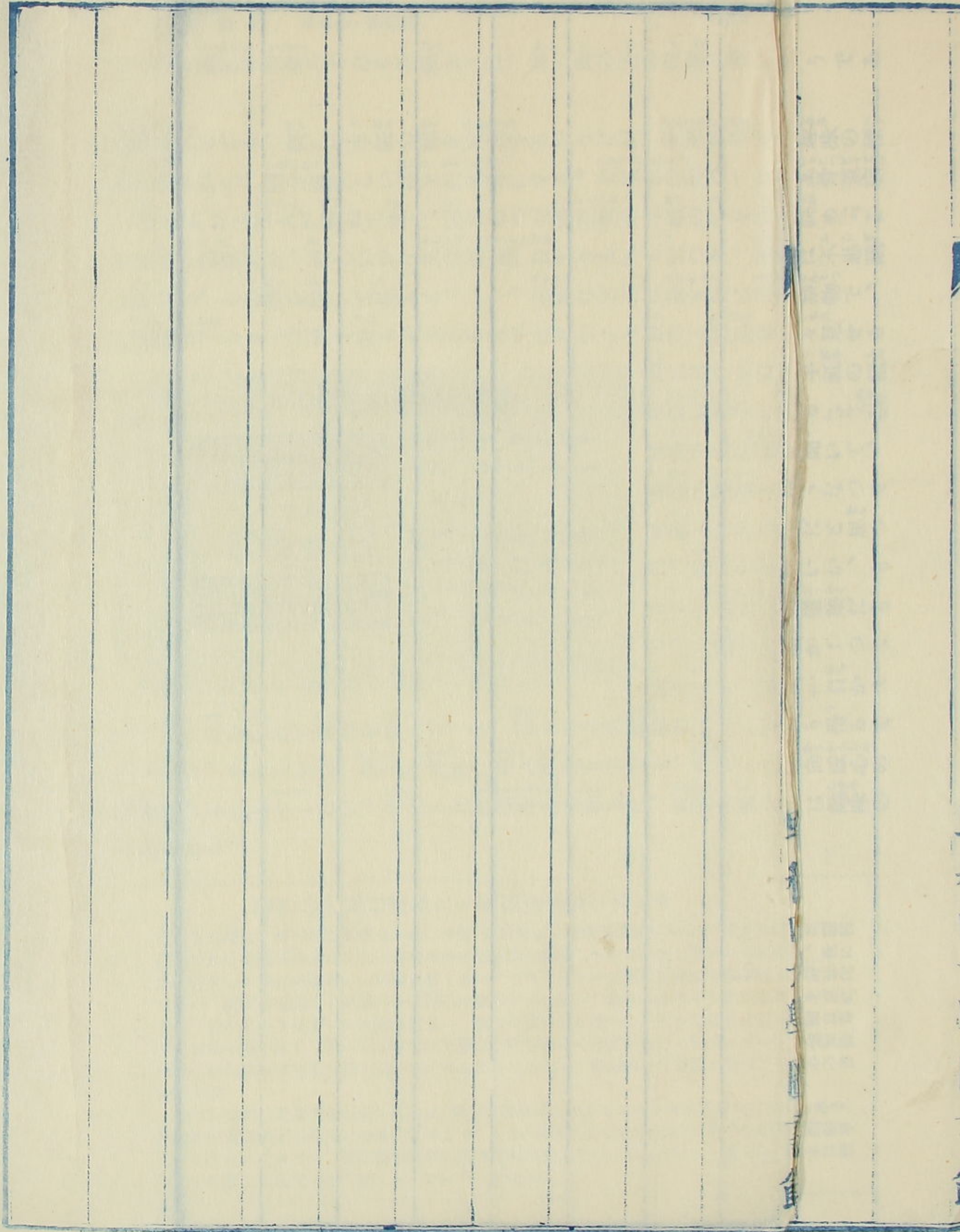
△長距離競走に堪へ得る卒業生

△甘じて人に使はるる卒業生

現 早稲田で先般大阪の某大社から卒業生の推薦方を依頼して來たので、特に世故に長けた物慣れたる十四名ばかりの候補者を推薦したが、得たものは、皆、第一の人物が探されたるやと云ふに、其の初めが及第して却つて居るもの、其の末が及第した。其處で某大社の常務取締役と云ふ肩かきと聞いて見たら、其の候補者も皆、居るも、以上は役に立つ者と認識せられ、然らざれば、校門以下に無能視せらるゝのである。

△甘じて人に使はるる卒業生

第三は先づ人に使はるる覺悟を固むることである。畢業卒業生は實業界にても入らば一人の使ふ間に起たんとすることを夢想して居る。之がゆゑ、失敗の根元である。成程學校では主として人を教へ、人間を教へて、人に使はるる覺悟を固むる。早稲田の



余が實業界に入る卒業生へし拾條の忠告

早稲田大學理事 市 嶋 謙 吉

△就職後不成績の卒業生

私が實業界に入らんとする早稲田大學生に向て平素教訓して居ることは、第一初心なれと云ふことである。ドウも近來の學生は、動もすれば老成振つて既に或る一種の型を有つて居る者が少なからぬが之れが却て實業界では受けが悪いのである。

(465)

現に早稲田で先般大阪の某大會社から卒業生の推薦方を依頼して來たので、特に世故に長けた物慣れたる十四名ばかりの候補者を推薦したが、偕て其内で如何なる性格の人物が選擇されたるやと云ふに意外にも初心な者が及第して却て世故に長けた者が落第した。其處で某大會社の當局者に向てドウ云ふ譯かと聞いて見たら、既に或る一種の型を有つて居るものは經驗と不成績であると答へたのである。

△長距離競走に堪へ得る卒業生

第二は職業を求むるに當ては自分の技術よりも一段低い所に就くと云ふことである。自分の技能以上の高地位と高給とを望むのが人情である。去りながら僥倖にして一躍高地位と高給とを贏ち得たならば、恐くは其人の一生の不幸であらうと思ふ。成程其當坐は同輩をして羨望せしむるに足るであらうが、遂には一生のロングランに於て逆戻し蹉跌する様な事を演ずるのである。

一 社雇主の眼光は新社員が入社せる瞬間に於て最も輝いて居るものである。故に其新社員が何等かの用務を命ぜられたる際に幸に出來榮が善ければ其社員は技倆以上に役に立つ者と認識せられ、然らざれば技倆以下に無能視せらるゝのである。此入社瞬間の成績こそ永く深く雇主の頭

腦に印象せらるゝので、之れが遂に社員の一生涯の運命を左右する様な結果を生ずる。

私が職業を求むるに當て自分の技術よりも一段低き所に就くと云ふ次第は畢竟以上の如き消息に應ぜんが爲めである。自分の技倆より一段低き地位に就けば、身常に餘裕を生じ自然事務の出來榮も善くなる譯である。仕事に追はるゝ様では立身が出來ぬ。仕事を追ふ様でなければ可かぬ。

△甘じて人に使はるゝ卒業生

第三は先づ人に使はるゝ覺悟を固むることである。學校卒業生は實業界にでも入らば一躍人を使ふ側に起たんことを夢想して居る。之れが抑も失敗の根元である。成程學校では主として人を使ふ學問を教へて、人に使はるゝ教育を施さぬ。畢竟永き將來に於て使用者の側に立つた時の

余が實業界に入んとする卒業生に與へし拾條の忠告

第拾參卷 第六號 (五一)

利用に供せんとする趣旨に外ならぬのである。人を使はんと欲せば、先づ人に使はれて人を使ふべき呼吸を會得せなければならぬ。故に學校を出たら先づ以て人に使はるゝと云ふ覺悟を定むるとが肝要である。

△己れの技倆よりも地位

を自覺し居る卒業生

第四は規律を嚴守することである。社規并に上役の命令を遵守すべきは勿論の事であるが、茲に一ツ注意すべきことは委任の範圍内に行動し濫りに才幹のあるに任せて委任の範圍を超越したる行動を慎むことである。例へば茲に一萬圓の金を儲くべく某地に出張を命ぜられたりとせんに、出張先に於て更に一萬圓を儲くべき好機ありとするも獨斷にて之を攫んてはならぬ。斯る場合には一應電報なりにて照會し命令を待つて然る後去就を決すべきである。然らざれば僥倖にして儲かつた場合は差支なしとするも、過まつて損を爲した場合には雇主の爲に頸を斬らるゝからである。否な僥倖にして儲けたりとするも、嚴格なる雇主ならば一方に

は其功を賞し他方には其罪を責むるであらうと想ふ。斯の如き人物は危險なりとの推定を受け雇主の警戒する所となるのが通例である。

△常に萬事担任されて居る卒業生

居る卒業生

第五は人格の修養である。近來は動もすれば學生の技藝の末に奔つて人格の本を等閑に附する様な傾向があるが、甚だ嘆ずべき次第である。近年實業界に於て漸く人格を重んずる傾向が見へる、現に我々は實業家から「技術の出来る人物は澤山あるが、ドウも人格の高き人が乏しく、支配人若しくは支店長として萬事を任せる者の少ないには困る」と云ふことを屢々耳にする。如何にも人格は大切である、人格の高いものは學校に於て學藝は朋輩に負けても、世の中に出ては自分に優る同窓の上に立つて之を駕御するの地位に立つと出来る。

△就職地の都鄙を撰まざる卒業生

ざる卒業生

第六は就職すべき土地の都鄙何れに拘ら

ず自己の手腕の輝く所を撰べよと云ふことである。多數の人は都會でなければ厭やだなどと言ふが、抑も大間違ひの話である。功名の地は必ずしも第一の都府には限らない、第一の都會は寧ろ人物が充満して居るから頭を擡げるには寧ろ不便である。爲すあるものは自己の手腕を充分揮ひ得る所を選ぶが上策だ、人物乏しき所は自分の手腕が充分輝き成功の端はこれから啓けるものである。

△小規模の處を厭ふ卒業生

第七は濫りに大會社に入るを希はずして、小會社若しくは個人商店に入ることを中心掛けよ。大會社大銀行は所謂人才の淵藪で、拔擢昇進の機會が乏しきのみならず、事務の分掌が嚴乎として劃されて居るから大局を知ることが出来ず、研究などには尤も不便である、之に反して小會社若しくは個人商店に入れば、全般の事務に涉ることが出来て趣味を感じるのである。働きたる次第により立身の機會が多いものである。

△苦の附く迄デットして居ない卒業生

第八は氣永く辛抱すべし立身を急ぐなと云ふことである。「ドウも學校出身者は氣位が高過ぎて困る」とは、我々が屢々實業家から聞く小言である。大抵は會社に入ると、一二年も経てば直ちに一躍して會社の課長位になれるものと期待して居るが、蓋し大間違ひの話で、なか／＼ソウ短兵急に行くものでない。會社の課長は其會社の命脈を司る所のものだ、書生揚句の無經驗者に會社の司命權を托するものがあるものか。何んとしても一箇所に少なくとも、十年辛抱すると云ふ覺悟が肝要である、而して永く辛抱すること大切な要訣は、仕事に興味を感じることである。どんな仕事でも趣味の存する者だ、之れを感じると否とは其人の心掛に在り、趣味を感じればドンナ仕事も面白くなつて来る。

△些細な經濟を考へない卒業生

第九は自分の備はれ居る會社商店の經濟

を、人の事と思はず瑣細の事にも多大の注意を拂へよと云ふことである。我々はこう云ふ小言を時々實業家から聴く「ドウも官立學校出身の技師は、會社の經濟を考へないで困る」と、蓋し官立學校出身者は學校の財政が豊かなる爲め、在學中費用などに頓着なく製作實驗などを遣つた習慣が附いて居る爲に、世の中に出ても其流儀を振り廻はし、算盤合つて勘定足らずと云ふ行動を爲すので、此苦情の起るは無理ならぬ事である。早稻田大學の如き私立の學校は、國税によりて立て居るごとき豊かな學校でないから、萬端切りツメて平生經濟的に教へて居る。それが爲官立學校の卒業生の如く無勘定の弊は無いが、尚ほそれにしても此點は深く注意して備主の經濟は自分の經濟と心得て無駄な事をしてはならぬ。

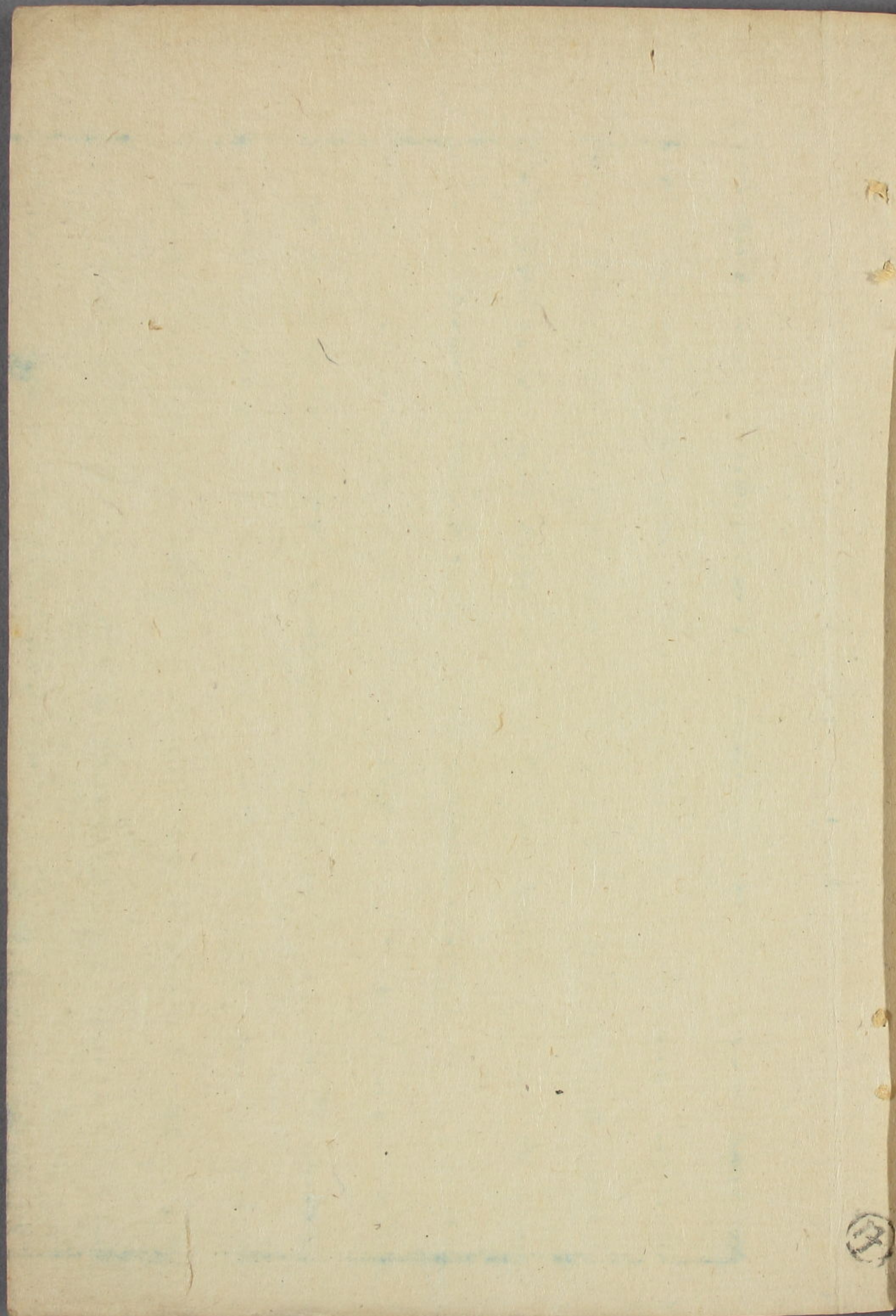
△小技則ち大技といふことを覺らぬ卒業生

高等教育を受けたる身より考ふれば、十露盤や簿記や手紙を書く事などは小技であるが、扱て世の中に出て即日必要を感じ備主より其人の利鈍を驗めざるゝは、

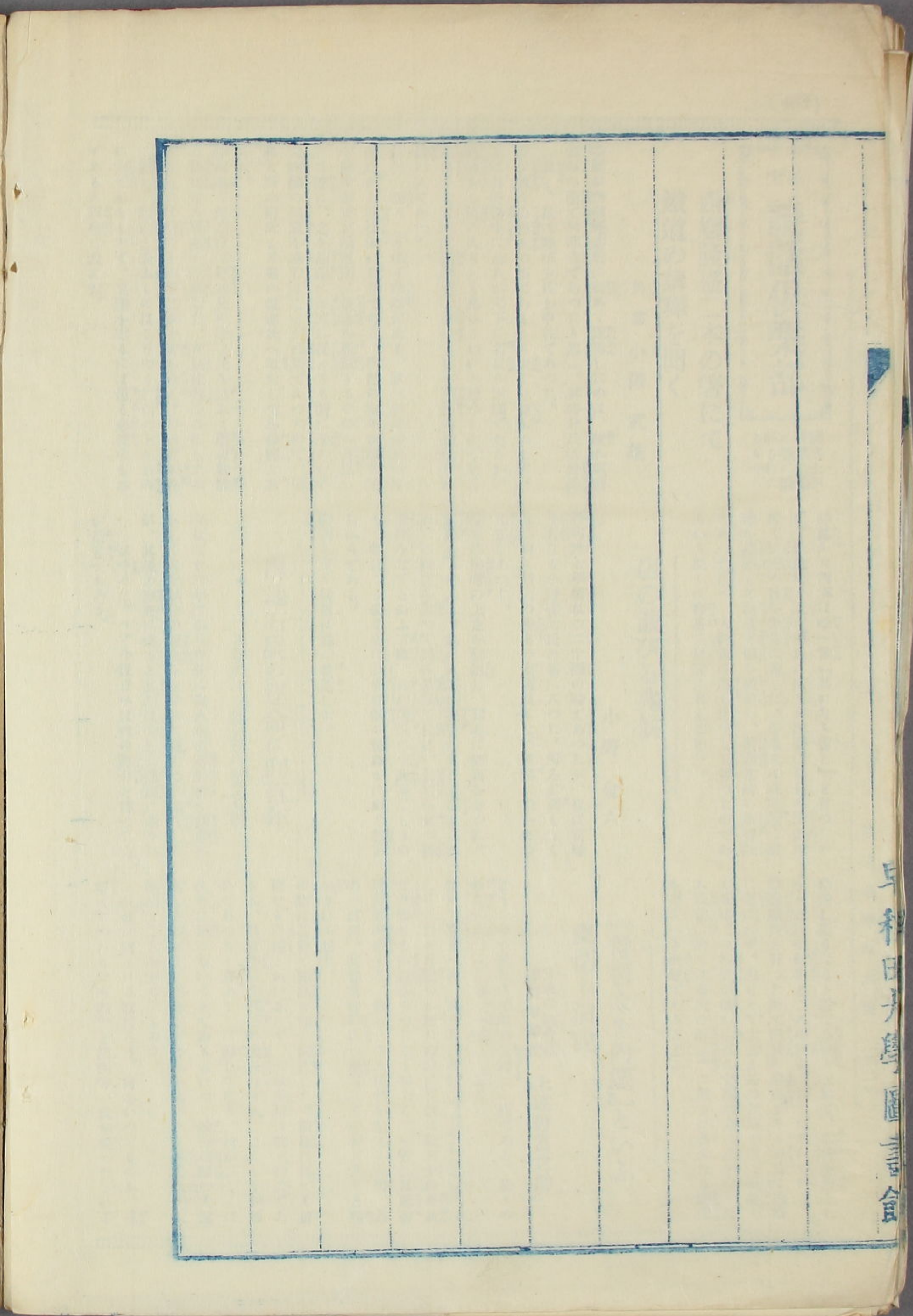
此の小藝であつて之れが爲めに終に入社間もなく、放逐を喰ふ奇禍が起るは決して珍しくない。學校に於て苦辛した六ヶしい原理原則は應用する機會は思つた程頻繁に來ないが、扱て學校に於て餘り氣にかけなかつた末技は時々刻々自分を襲撃して来る。そこでこれにマゴツクと折角苦心して修めた専門の學識の應用を試むる前に、お拂箱を喰ふ危險あることを思へば、此等の末技の練習の大切であることは言ふ迄もなからう。

埼玉縣入間川町青年會暨會式と増田社長の講演

埼玉縣入間川町青年會新に成立せしを以て、其發會式を二月八日午後同地劇場に於て舉行し、午後よりは講演會を催したり、町長細實金藏氏開會の挨拶を爲し、次で足立栗園氏一場の講演を爲し、其れより増田社長は約二時間に亘りて萬人に必要なる處世の心得に就き、古今東西の實例に徴して講演したるに非常の大喝采なりしと云ふ、當日は遠く豐岡町より紫田滿義氏始め、業を休んで來聽したる者多く、郡視學田島紋次郎氏の如きは、二週間の講習を受けたるに同じき材料を聴取したりなどと、痛く感歎され、八百餘名の聽衆皆満足して退散したりと云ふ、當日町内各戸にては國旗を掲げて祝意を表したり、町長井久入間川男子小學校長金山坂次郎同女子小學校長佐久間得三兩氏は専ら盡力されしと。



⑤



早稲田大學圖書會

